特 101
559

兵器保存要領

第八類
第九類

国立国会
51.10. 1
図書館

始

特101
559

第八類　通信器材

大正
4. 2. 17
内交

第八類　通信器材

目次

第一章　通則……百七
第一節　手入……七
第二節　格納……一〇
第三節　檢査……一一
第二章　電鈴式電話機……一一
第一節　手入……一一
第一款　常用品ノ手入……一一
第二款　貯藏品ノ手入……一五
第二節　格納……一六
第三節　檢査……一六
第四節　分解及結合……二一
第五節　取扱上ノ注意……二四
第三章　震動式電話機……二五
第一節　手入……二五
第一款　常用品ノ手入……二五
第二款　貯藏品ノ手入……二七
第二節　檢査……二七
第三節　分解及結合……三一
第四節　取扱上ノ注意……三一
第四章　現字機……三四
第一節　手入……三四

第一款　常用品ノ手入……三五
第二款　貯藏品ノ手入……三八
第二節　格納……三九
第三節　檢査……四〇
第四節　分解及結合……四五
第五節　取扱上ノ注意……四六
第五章　電槽……四九
第一節　手入……四九
第二節　格納……五〇
第三節　檢査……五一
第四節　取扱上ノ注意……五三
第六章　乾電池……五三

第七章　被覆線……五六
第一節　手入……五六
第二節　格納……五八
第三節　檢査……六〇
第四節　取扱上ノ注意……六三
第五節　修理方法ノ概要……六四
第八章　護謨類（被覆線ヲ除ク）……七二
第一節　手入……七二
第二節　格納……七三
第三節　檢査……七四

第八類　通信器材

第一章　通則

第一節　手入

第一條　手入ノ要旨ハ塵埃、汚垢等ノ附著ヲ去リ又脂油ヲ塗施シ發銹、磨損及變質等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

第二條　手入ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　手入ハ乾燥、清潔ナル場所ニ於テ清淨ナル手入用具及品質良好ナル脂油類ヲ用ヰ細心注意シテ之ヲ行フヘシ

二　電氣的接點部ハ清潔、柔軟ナル布片又ハ磨皮ヲ以テ拭淨シ決シテ塗油スヘカラス

三　精密機械ノ塗料塗施部及「エボナイト」部ノ汚垢ヲ除去スル爲ニハ布片又ハ刷毛ヲ以テ行ヒ酒精及揮發油類ヲ使用スヘカラス鍍金又ハ塗料ノ剝脱セルモノハ之ヲ修理スヘシ但シ塗料ノ剝脱セル鐵部ハ修理スルニ至ル迄防錆用脂油ヲ塗施シ置クヲ要ス

四　塗料ヲ塗施シ非サル部分例ヘハ發電器軸等ハ揮發油ヲ浸シタル布片又ハ刷毛ヲ以テ塵埃、汚垢及錆ヲ除去シ揮發油ノ全ク發散シタル後防錆用脂油ヲ塗施スヘシ

五　防錆用脂油ヲ塗施スルニハ充分拭淨シタル後極メテ薄ク全面ニ普及セシメ且手ヲ觸ルルコトナキ樣注意スヘシ

六　「ニッケル」鍍鐵部ハ發錆スルコトアルヘキヲ以テ要スレハ防錆用脂油ヲ塗施スヘシ

七　燒漆、「エナメル」又ハ「ペルニー」塗施部等ノ塗料剝脱セルモノ又ハ發錆セルモノハ除錆後塗料ヲ塗施スヘシ但シ機能ニ關係ヲ及ホス要部ハ修理ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條　手入ニ使用スヘキ脂油ノ種類、用途及使用區分左ノ如シ

種類	用途	使用區分
時計油	防錆及防擦用	電話機、現字機等ノ如キ精密機械ノ塗料ヲ塗施シ非サル鐵部、「ニッケル」鍍鐵部、樞軸及摩擦部
常用礦油	防錆及防擦用	常用品電話機、現字機等ノ精密機械ヲ除クノ鐵部
格納用礦油	防錆及防擦用	貯藏品電話機、現字機等ノ精密機械ヲ除クノ鐵部
揮發油	洗滌用	汚垢又ハ舊油ノ膠著セル部
鯨油、牛脂ノ複合脂	塗布用	革部

第四條　常用品ノ手入ハ通常之ヲ分チテ普通手入及精密手入ノ二トス

普通手入トハ日常行フ手入又ハ時時必要ニ應シ局部ニ就キ行フ簡易ナル手入ヲ謂フ

通信器材　通則　手入

精密手入トハ普通分解セサル部分ニ行フ手入ヲ謂フ

第五條　貯藏品ノ手入ハ通常之ヲ分チテ普通手入及精密手入ノ二トス

第六條　精密手入ハ將校監視ノ下ニ下士又ハ技術熟練ナル兵卒ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ

第二節　格納

第七條　貯藏品ハ一時的格納ノモノ及永久的格納ノモノ並新古ヲ區分シ其ノ點檢、手入及取扱等ニ便ナル如クスヘシ

第八條　貯藏品ハ倉庫ノ周壁又ハ家根裏ニ近接セシメサルヲ可トス

第九條　格納倉庫ニ關スル注意ハ第一類第一編第二章第十九條ヲ準用スヘシ

第三節　檢査

第十條　檢査ノ要旨ハ手入及取扱ノ闕點並加修ノ時期ヲ前知シ之ニ對スル處理ヲ迅速ニシ以テ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

第十一條　檢査ニ際シ發錆及破損ノ箇所ヲ發見シタルトキハ必ス其ノ理由ヲ探究シ同一過失ニ陷ラサル如ク豫防スヘシ

第二章　電鈴式電話機

第一節　手入

第一款　常用品ノ手入

第十二條　普通手入ノ方法左ノ如シ

一　外部ヲ拭淨シ特ニ發電器轉把、接續子、接續子栓、送受話器分解スルコトナク及押釦ノ塵埃、汚垢、唾液ヲ除去シ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨スヘシ送話器ノ開口部ニハ時時薄ク時計油ヲ塗施シ發錆ヲ豫防スヘシ

二　發電器樞軸部ハ使用頻繁ナル時期ニ在リテハ時時、時計油ヲ塗施シテ其ノ摩擦ヲ防クコトニ注意スヘシ要スレハ精密手入ノ方法ニ依リ拭淨シタル後時計油ヲ塗施スヘシ

三　雨雪天又ハ塵埃多キ日ニ於テ使用シタルトキハ速ニ布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シ雨水等ノ内部ニ浸入スルヲ防キ特ニ送受話器及接續紐ハ成ルヘク速ニ水分ヲ拭ヒ去ルヘシ若接續紐ニ雨水ノ浸入シタルトキハ布片又ハ紙ヲ以テ數回水分ヲ吸收シ空氣ノ流通良キ室内ニ於テ乾燥シ決シテ火氣又ハ日光ヲ以テ急ニ乾燥スヘカラス又送話器内部ニ雨水ノ浸入シタルトキハ精密手入ノ方法ニ依リ手入スヘシ

第十三條　精密手入ハ毎年一回普通手入ニ關スル規定ヲ準用スルノ外左ノ各號ニ依リ之ヲ行ヒ一般ニ時計油ノ塗替ヲ爲シ要スレハ塗料ノ補修ヲ爲スヘシ

一　發電器ノ手入左ノ如シ

イ　轉把ノ螺絲部、大齒輪及小齒輪ハ拭淨シタル後少量ノ時計油ヲ塗施スヘシ

ロ　大齒輪軸及大齒輪軸發條ハ拭淨シタル後時計油ヲ塗リ又注油孔ヨリ樞軸部ニ時計油ヲ塗施シ小齒輪軸ニハ兩側ニ在ル注油孔ヨリ時計油ヲ塗施スヘシ但シ小齒輪ノ反對側ニ在ル發電子頭部ノ注油孔ニハ防擦ヲ度トシ多キニ失セサルヲ要ス

ハ　大齒輪軸及小齒輪軸ノ頭部並之ニ對應スル接觸發條ハ充分ニ塵埃、汚垢ヲ除去シ決シテ塗油スヘカラス

ニ　發電器坐ニ於ケル接觸發條（附圖第一圖A及B）及絶緣駐螺（附圖第一圖C）附著セル塵埃及舊脂油ヲ充分拭淨スヘシ

二　接續子栓特ニ其ノ内部ハ綿密ニ塵埃及濕氣ヲ去リ各螺子間ノ短絡ヲ防クヘシ

三　電鈴ノ極鐵及接極子軸ハ塵埃ヲ除去シ摩擦ヲ減少スヘシ

四　避雷器ハ分解スルコトナク塵埃ヲ除去スヘシ

五　捲線ノ被包發黴シタルトキハ乾布ヲ以テ徐ニ之ヲ拭淨シ決シテ濕布ヲ用ウヘカラス

六　送話器開口部及其ノ發條ニ於ケル「ニッケル」鍍鐵部ハ拭淨シタル後薄ク時計油ヲ塗施スヘシ濕氣ノ爲炭素粒ノ凝固シタルモノアルトキハ分解ノ上之ヲ紙上ニ置キ文火ヲ以テ乾燥スヘシ

七　受話器内ニ濕氣、塵埃ノ侵入シタル虞アルトキハ之ヲ分解シ震動鈑ハ柔軟ナル布片ヲ以テ徐ニ拭淨シ捲線部ハ徐徐ニ乾燥スヘシ

（一時使用セサルモノニ在リテハ受話器震動鈑及受話器磁石鐵心ニ薄ク時計油ヲ塗施スルヲ可トス）

第二款　貯藏品ノ手入

第十四條　普通手入ハ毎年一回雨期後ニ於テ常用品普通手入ニ準シ塵埃、發黴及濕氣等ヲ拭淨スルモノトス此ノ際脂油ノ塗換ハ通常行フコトナシ但シ毎年三、四回發電器ヲ回轉シ脂油ノ凝結ヲ防キ其ノ凝結シタルモノハ精密手入ニ準シ手入スヘシ

第十五條　精密手入ハ毎年又ハ隔年ニ一回乾燥期ニ於テ常用品精密手入ニ準シ之ヲ行フモノトス

第二節　格納

第十六條　貯藏品ハ左ノ各號ニ依リ格納スヘシ

一　濕氣ヲ避クル爲空氣ノ流通良好ナル位置ヲ選ムヘシ若濕氣ヲ被リタルモノハ手入後之ヲ標示シ爾後ニ於ケル異狀ノ有無ヲ檢査スヘシ

二　電鈴器ハ乾電池ヲ離脫シ重疊スルコトナク送受話器ハ布片又ハ紙ヲ以テ之ヲ包ミ電鈴器ノ側傍ニ配列シ兩者ヲ容易ニ抽出シ得ル如ク適當ノ間隔ヲ存シテ格納スヘシ

第十七條　常用品ハ通常鞄ニ收容シタル儘棚上ニ整置スルモノトス

第三節　檢査

第十八條　檢査スヘキ事項左ノ如シ

一　信號、通話及避雷器ノ機能完全ナリヤ

二　各部發條ノ機能完全ナリヤ

三　各部螺子ノ緊定度適當ナリヤ又螺子ノ紛失セルモノナキヤ

四　木部及其ノ他ニ闕損、變歪セルモノナキヤ

五　塗料ノ剝脫セルモノナキヤ又塗料ヲ塗施シ非サル鐵部及「ニッケル」鍍鐵部ノ防錆確實ナリヤ

六　前各號ノ外各部ノ手入良好ナリヤ

第十九條　信號、通話及避雷器ノ機能檢査方法左ノ如シ

一　電話機二箇以上ヲ有スル場合ニ於テハ兩電話機ヲ若干米ノ間隔ヲ存シテ裝置シ中被覆線ヲ以テ之ヲ連結シ相互ニ信號及通話機能ヲ檢スヘシ若信號不良ナルトキハ各電話機ニ就キ其ノ接續螺子ニ

兩指ヲ觸レ轉把ヲ回轉シ電流ノ導通ヲ檢スヘシ（電流ヲ感スルトキハ發電器ニ故障ナク電鈴ノ調整不良ナルカ電鈴回線斷線シアルカ又避雷器短絡シアルモノトス電鈴ヲ調整スルニハ打子ノ振動ニ注意シツツ調度孔ヨリ電鈴ノ間隔ヲ調度シ尚不良ナルトキハ電鈴器ノ後面板ヲ脫シ接極子軸ノ駐螺ヲ修正シ次ニ左右下部ニ在ル螺子ヲ以テ接極子ノ間隔ヲ調度スヘシ又全ク電流ヲ感セサルトキハ發電器起電力ノ有無及發電器ノ回線ニ就キ更ニ檢査ヲ行フモノトス此ノ起電力ノ有無ハ兩指ヲ直接發電器ノ接觸發條ト發電器ノ坐又ハ繼鐵ニ接シ轉把ヲ回轉シ電流ヲ檢スヘシ又發電器ノ回線ニ就キ檢査スルニハ發電器ノ回線中主トシテ自働接續部（附圖第一圖D）ノ作用、各接觸發條（附圖第一圖A、B、E）ノ接觸、接觸發條ニ於ケル各駐螺ノ緊定、絶緣駐螺及接續子栓ノ吻合等ヲ檢スルモノトス）

又通話不良ナルトキハ第二號ノ通話檢査ニ準シ送受話器ノ各部ニ就キ細部ノ檢査ヲ行フヘシ（通話ノ不良ハ主トシテ送話器及電池ノ接續ニ基因スルコト多キヲ以テ其ノ原因送話器ノ故障ナルトキハ送話器ヲ分解シ震動鈑ノ闕損及炭素粒ノ量、脫出、凝固等ノ有無ニ注意スヘシ）

二　電話機一箇ヲ有スル場合ニ於テハ轉把ヲ回轉シ電鈴ノ打鳴ヲ檢査シ（若打鳴不良ナルトキハ接續螺子ニ兩指ヲ觸レ前號ニ準シ電流ノ導通ヲ檢査スヘシ）次ニ接續螺子ヲ導線ニテ短絡シ押釦ヲ押ヘ送話口ニ向ヒ音聲ヲ發シ明瞭ニ受話器ニ感スルヤ否ヤヲ檢スヘシ（明瞭ニ感セサモノハ機能不良ナルモノニシテ其ノ原因送話器、受話器、押釦、電池、接續ノ何レニ在ルヤヲ確ムル爲送受話器ノミチ採リ押釦ヲ押ヘ接續子三列ノ兩側ニ在ル二個ノ接續子（附圖第二圖A、B）ヲ電池ノ兩端ニ接觸セシムルトキ震動鈑ヲ輕打スルカ如キ音響ヲ聞クトキハ受話器及押釦ニ故障ナキモノトス）

接續子ヲ電池ニ接シタル儘送話口ニ向ヒ音響ヲ發シ明瞭ニ受話器ニ感スルヤ否ヤヲ檢スヘシ（明瞭ニ受話器ニ感スルトキハ送話器ニ故障ナク電鈴器ニ於ケル電池ノ接續不良ナルカ一次回線又ハ二次回線不良ナルカ又ハ接續子栓ノ吻合不良ナルカニ因ルモノトス）

三　避雷器ノ機能ヲ檢スルニハ電鈴器ニ送受話器ヲ裝シ（接續子ヲ短絡セス）轉把ヲ回轉スヘシ（此ノ際電鈴打鳴セス押釦ヲ押ヘ初メテ電鈴打鳴スルトキハ避雷器短絡シアルモノトス此ノ場合ニ於テハ避雷器用炭素板ヲ除キ其ノ裏面ニ在ル可熔合金ヲ檢シ若異狀アルトキハ豫備炭素板ト交換スルモノトス）

第二十條　第十八條第二號乃至第五號ノ檢査ヲ行フニ當リ特ニ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　電鈴器轉把變歪シ又ハ其ノ螺絲部損傷セルコトナキヤ

二　電鈴器ノ各接續線及接續螺子ノ緊定確實ナリヤ

三　發電器坐駐螺、發電器磁鐵駐螺及發電器大齒輪軸發條駐螺ノ緊

定確實ナリヤ

四　發電器接觸發條螺子ノ緊定確實ナリヤ又絶縁駐螺（附圖第一圖C）ハ破損若ハ紛失セルコトナキヤ

五　電鈴匡ノ固著及接極子調度螺子ノ緊定確實ナリヤ

六　電鈴調度螺子ハ其ノ坐ニ破損ナキヤ又緊定適度ナリヤ

七　避雷器用炭素板及雲母板ハ破損セルコトナキヤ

八　電池接續發條ノ作用完全ナリヤ

九　電池匡ノ固著確實ナリヤ又發電器ハ電池匡ニ接觸セルコトナキヤ

十　受話器蓋ノ螺定確實ナリヤ

十一　受話器裏面ニ於ケル螺子ノ緊定確實ナリヤ、受話器匡ハ動搖セサルヤ又受話器桿ハ變歪セルコトナキヤ

十二　押釦ノ彈力ハ適當ナリヤ其ノ上下ニ在ル壓定鈑ハ磨滅セルコトナキヤ

十三　送話口ノ樞軸部ハ破損セルコトナキヤ

十四　送話器ノ螺定確實ナリヤ又送話器匡ハ動搖セサルヤ

十五　接續紐ハ濕潤又ハ損傷セルコトナキヤ又其ノ接著確實ナリヤ

十六　接續子ノ吻合確實ナリヤ又接續子栓動搖セサルヤ

十七　發電器自働接續部、發電子頭部、絶縁螺子、避雷器、接續子及接續子栓ノ内外部ノ拭淨充分ナリヤ

第四節　分解及結合

第二十一條　分解及結合ハ左ノ部分ニ限リ之ヲ行フコトヲ得此ノ分解及結合ハ將校監督ノ下ニ下士又ハ技術熟練ノ兵卒ヲシテ之ヲ行ハシムヘ

シ

一　電池ノ入換ニ當リ分解ヲ要スル部分

二　電鈴ノ調整ニ當リ分解ヲ要スル部分

三　避雷器用炭素板

四　送受器ノ震動鈑

第二十二條　分解及結合ノ方法左ノ如シ

一　電鈴器後面板ヲ分解スルニハ接續子栓ノ頭部ヲ壓迫毀損スルコトナカラシメ且各部ノ塗料ヲ剝脱セシメサル爲適宜ノ依托物ヲ置キ後面板螺子ヲ緩メ後面板ヲ下方ニ引キ上部ノ切闕部ヲ脱スヘシ

但シ後面板ノ各螺子ハ全ク之ヲ抽出セサルコトニ注意スヘシ

二　乾電池ノ入換困難ナル場合ニハ乾電池匡ノ右側ニ在ル螺子ヲ脱シ匡ヲ右方ニ抽出スヘシ

三　避雷器ハ發條駐螺ヲ緩メ炭素板ヲ右方ニ抽出スヘシ

四　受話器ハ「エボナイト」製蓋板ヲ脱シ震動鈑ヲ徐ニ側方ニ引キツツ分解スヘシ結合ニ當リテハ其ノ螺絲部ヲ闕損セシメサルコトニ特ニ注意スヘシ

五　送話器ハ清潔ナル布又ハ紙上ニ於テ之ヲ上方ニ向ケ蓋鈑ニ在ル三箇ノ螺子ヲ脱シテ徐ニ蓋鈑ヲ外シ次ニ小鐵線鋏ノ類ヲ以テ炭素板上ニ在ル壓定輪鈑ヲ確實ニ挾持シテ之ヲ脱シタル後震動鈑ヲ離脱スヘシ此ノ際震動鈑ヲ破損セシメサルコトニ注意スヘシ

第二十三條　分解及結合ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　螺廻ハ充分壓定シテ之ヲ使用スヘシ又螺子ノ頭部ヲ損傷セシメサルコトニ注意スヘシ

二　分解シタル部品ハ清潔ナル布又ハ紙上ニ順序正シク排列シ結合

ニ際シテハ分解ト反對ノ順序ヲ以テ之ヲ行フヘシ

三　發電器ノ磁鐵ヲ分解スルニハ特ニ磁鐵ヲ激動、衝突又ハ落下セサルコトニ注意シ分解シタルトキハ其ノ相互ノ異極ヲ吸引セシメ置クカ又他ノ繼鐵ヲ以テ兩極ヲ短絡シ置クヘシ結合ニ當リテハ各同極ヲ同側ニ位置セシムヘシ

第五節　取扱上ノ注意

第二十四條　使用ノ前後ニ於テハ單簡ニ機能檢査ヲ行フヲ要ス

第二十五條　送受話器特ニ其ノ接續紐及送話器ハ濕潤セシメサルコトニ注意シ又接續紐ハ之ヲ撓回セシメサルヲ要ス

第二十六條　送受話器ト電鈴器トヲ裝著又ハ離脱スルニハ接續子ニ附著シアル握把ヲ以テシ接續紐ノ接著部ヲ動搖又ハ破損セシメサルコトニ注意スヘシ

第二十七條　送受話器ヲ其ノ鞘ニ收容スルニハ成ルヘク押釦ヲ壓迫スルコトナク且接續紐ヲ緊張セサル如クシ特ニ受話器ヲ鞘蓋ニテ强壓シ其ノ桿ヲ變歪セシメサルコトニ注意スヘシ

第三章　震動式電話機

第二十八條　震動式電話機ノ手入、格納、檢査、分解及結合等ハ電鈴式電話機ニ關スル規定ニ準スルノ外左ノ各節ニ依ルヘシ

第一節　手入

第一款　常用品ノ手入

第二十九條　普通手入ノ方法左ノ如シ

一　外部ヲ拭淨スルノ外特ニ接續器、送受話器分解スルコトナク電路開閉器ノ塵埃、汚垢等ヲ綿密ニ拭淨スヘシ

二　使用頻繁ナル時期ニ在リテハ時時震動器ノ蓋板ヲ脫シ電池接觸發條及震動室ノ塵埃ヲ拭淨シ特ニ震動鈑ノ接點、接續螺子ノ接觸部及彈機接點ノ拭淨ニ注意スヘシ

第三十條　精密手入ハ左ノ如シ

一　震動部ノ震動鈑、震動鈑ノ接點已ムヲ得サル場合ニ限リ接觸螺子ヲ緩ムヘシ及調整發條ヲ拭淨スヘシ

二　接續螺子ノ接觸部ヲ拭淨シ特ニ震動室ニ於ケル接續紐ニ通スル接續螺子及其ノ附近ヲ充分拭淨スヘシ

三　震動部捲線ノ被包發黴シタルトキハ其ノ接續線ヲ損傷セシメサルコトニ注意シ乾布ヲ以テ徐ニ之ヲ拭淨スヘシ

四　送話器ノ震動鈑濕氣ヲ蒙リタルトキハ之ヲ分解シテ徐ニ乾燥スヘシ但シ炭素粉凝結シタルトキハ修理ノ手續ヲナスヘシ

第二款　貯藏品ノ手入

第三十一條　普通手入ハ毎年一回雨期後ニ於テ常用品普通手入ニ準シ塵埃、發黴及濕氣等ヲ拭淨スルモノトス

第三十二條　精密手入ハ毎年一回又ハ隔年一回乾燥期ニ於テ常用品精密手入ニ準シ之ヲ行フモノトス

第二節　檢　査

第三十三條　檢査スヘキ事項左ノ如シ

一　通話及信號ノ機能完全ナリヤ

二　各部發條ノ機能完全ナリヤ

三　各部螺子ノ緊定度適當ナリヤ又螺子ノ紛失セルモノナキヤ

四　電池ノ保定確實ナリヤ

五　外匡及其ノ他各部ニ闕損變歪セルモノナキヤ

六　各部ノ手入良好ナリヤ

第三十四條　通話及信號機能檢査ノ方法左ノ如シ

一　通話ノ機能ヲ檢スルニハ接續器ノ「直」及「地」ヲ導線ニテ短絡シ電路開閉器ヲ壓シ送話口ニ向ヒ音聲ヲ發シ受話器ニ感スルヤヲ檢スヘシ（明瞭ニ感スルトキハ通話部ノ機能ニ故障ナキモノトス）若之ヲ感セサルトキハ電池ノ接觸ヲ檢スル爲徐ニ電路開閉器ヲ以テ電流ヲ斷續シ受話器ニ感スルヤヲ檢スヘシ（受話器ノ震動鈑ヲ輕打スル如キ音ヲ聞クトキハ電池ノ接觸、受話器及開閉器ニ故障ナキモノトス）尚之ヲ感セサルトキハ震動室ニ於ケル受話器回線ノ兩接續螺子（赤色ノ糸ヲ横ニ卷キタルモノ）ニ懷中電壓電流計ヲ接續シ電流ノ導通ヲ檢スヘシ（電流導通スルトキハ電池ノ接觸完全ニシテ通常送話器特ニ其ノ後部ニ在ル「エボナイト」匡ノ内部ニ故障アルモノトス）

二　信號ノ機能ヲ檢スルニハ前號通話檢査ノ方法ニ依リ電池ノ接觸完全ナルコトヲ確メタル後電鑰ヲ壓下シ震動部ノ震動ヲ檢スヘシ若震動セサルトキハ主トシテ震動部ノ調度ニ就キ檢スヘシ（震動鈑ト電磁石トノ間隔、震動鈑ノ彈力及變歪ヲ檢シ更ニ接觸螺ノ接觸、震動鈑接點及接續線ヲ檢シ要スレハ第四十條ニ依リ調整ノ上之ヲ檢スヘシ）震動部ノ調整及電池ノ接觸等ハ往往變化スルコトアルヲ以テ一回其ノ調整ヲ了リタル後震動器ニ動搖ヲ與フルモ其ノ變化ナキヤヲ檢スヘシ

三　蓄電器ヲ用ヰテ行フ通話及信號機能ノ檢査ハ接續器ノ「蓄」及「地」ヲ短絡シ第一號ト同樣ノ檢査ヲ行フヘシ

第三十五條　第三十三條第二號乃至第五號ノ檢査ニ關シ特ニ注意スヘキ

事項左ノ如シ

一　電鑰ノ機能完全ニシテ彈機ヲ壓定スル作用良好ナリヤ

二　震動室ニ於ケル各接續螺子ノ緊定確實ナリヤ　特ニ接續紐ノ接續螺子ニ注意スヘシ

三　震動部坐鈑、震動鈑特ニ接觸螺、駐螺ノ緊定確實ナリヤ

四　彈機ノ彈力適當且平等ナリヤ

五　電池接觸發條ノ機能及電池ノ保定良好ナリヤ

六　接續器ニ於ケル接續螺子ノ緊定確實ナリヤ

七　受話器蓋ノ螺定及接續口ノ緊定確實ナリヤ

八　送受話器匡動搖セサルヤ

九　伸縮管ノ伸縮作用適度ニシテ變歪セルコトナキヤ

十　握把上部ニ於ケル駐螺ノ緊定確實ナリヤ又「エボナイト」環ハ破損又ハ紛失セルコトナキヤ

十一　電路開閉器ノ開閉圓滑ナリヤ又其ノ彈力適當ナリヤ

十二　接續紐ハ濕潤又ハ損傷セルコトナキヤ

第三節　分解及結合

第三十六條　分解及結合ハ左ノ部分ニ限リ之ヲ行フコトヲ得此ノ分解及結合ハ將校監督ノ下ニ下士又ハ技術熟練ノ兵卒ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ

一　電池ノ入替ニ當リ分解ヲ要スル部分

二　震動部ノ調整ニ當リ分解ヲ要スル部分

三　受話器ノ震動鈑

第四節　取扱上ノ注意

第三十七條　電話機ヲ鞄ニ收容シ又ハ脫出スルニハ震動器ノ蓋板ノミヲ握ルコトナク側板ヲ握リテ之ヲ行ヒ上蓋鈑ノ駐鉤及接續紐ヲ破損セシメサル爲送受話器ヲ强壓セサルコト及接續紐ヲ緊張セサルコトニ注意スヘシ

第三十八條　電話機ヲ鞄ニ收容シテ格納又ハ携帶スルトキハ電鑰上ノ革部ヲ壓下セサルコトニ注意スヘシ

第三十九條　電池ノ接觸及安定ヲ確實ナラシムル爲要スレハ電池ノ下部及兩側ニ紙片ノ類ヲ挿入スヘシ

第四十條　震動部調整ノ方法左ノ如シ但シ之ヲ調整スルニハ熟練ナル伎倆ヲ要スルヲ以テ猥リニ行フヘカラス又之ヲ行フノ要アルトキハ其ノ順序方法ヲ充分了解シタル後ニ於テスヘシ

一　第三十四條ニ依リ電池ノ接觸ヲ檢シタル後震動鈑ノ變歪、接點ノ對應及震動鈑ト調整發條頭部トノ接觸ヲ檢シ要スレハ之レカ修正又ハ拭淨ヲ行フヘシ

二　接觸螺ヲ緩メ震動鈑ト電磁石トノ間隔及震動鈑彈力ノ良否ヲ手ノ感覺ニ依リテ檢シ之ヲ修正スヘシ

三　接觸螺ヲ震動鈑ニ輕ク接觸セシメ一次回線用彈機ヲ短時間壓下シ震動鈑ノ震動スル迄調整螺及接觸螺ヲ修正スヘシ（電鑰ヲ壓下シタルトキ震動鈑ヲ引キ付クルカ如キ音ヲ聞クトキハ震動鈑ト電磁石トノ間隔近キモノニシテ音ヲ聞カサルトキハ其ノ間隔遠キモノナルヲ以テ調整螺及接觸螺ヲ進退セシメ之ヲ調整スヘシ）

四　調整ヲ終リタルトキハ接觸螺ノ駐螺ヲ全ク緊定シ更ニ震動ヲ檢シ要スレハ僅ニ調整スヘシ此ノ調整ヲ終リタル後ニ於テモ各駐螺ノ緊定度ヲ變スルコトアルヲ以テ震動器ニ動搖ヲ與ヘ再之ヲ檢スルモ變化ナキヲ認ムルニ至リテ調整ヲ終リタルモノトス

五　調整ヲ行フニ當リ彈機ヲ壓下スルトキハ電池電力ノ降下著シキ

ヲ以テ彈機ノ壓下ハ成ルヘク回數ヲ減シ且極メテ短時間ナルヲ要ス

第四章　現字機

第一節　手入

第四十一條　現字機ノ手入ハ電鈴式電話機ノ手入ニ關スル規定ヲ準用スルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

一　染烘鐵部及螺子類ニハ防錆用脂油ヲ塗施スヘシ若發錆シタルトキハ第二條第四號ノ方法ニ準シ除錆シ要スレハ更ニ之ヲ染烘スヘシ但シ染烘困難ナルモノハ修理ノ手續ヲ爲スヘシ

二　手入前ニ於テ印字機ノ壓車ヲ起立セシメ且大發條ヲ弛緩セシムヘシ

三　印字機ノ樞軸部、摩擦部ノ拭淨及塗油ノ良否ハ其ノ機能及衰損ニ影響スルコト大ナルヲ以テ其ノ手入ハ特ニ周到ナルヲ要ス

第一款　常用品ノ手入

第四十二條　普通手入ハ外部ヲ一般ニ拭淨スルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

一　電鍵部ノ兩接點ハ柔軟、清潔ナル布片又ハ磨皮ヲ以テ塵埃、汚垢ヲ拭淨スヘシ

二　接續螺子、調度螺子及轉把等ハ直接手ニ觸ルル部分ヲ拭淨スヘシ

三　電磁石、紙滑臺及印字車ハ其ノ外部ニ於ケル塵埃、汚垢ヲ拭淨スヘシ

四　墨汁壺ハ印字機ヨリ離脫シ拭淨スヘシ但シ一時使用セサルモノ

現字機　手入

ニ在リテハ墨汁ヲ墨汁容器ニ移シテ拭淨スヘシ

五　使用頻繁ナル時期ニ於テハ印字機中、回轉速ナル車軸及永轉齒輪ノ摩擦スル部分ニ時時少量ノ時計油ヲ塗施スヘシ

六　雨雪天又ハ塵埃多キ日ニ使用シタルトキハ速ニ布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シテ雨水、塵埃等ノ内部ニ侵入スルヲ防キ要スレハ摩擦部及鐵部ニ時計油ヲ塗施スヘシ若内部ニ雨水ノ侵入シタルトキハ精密手入ニ準シ手入スヘシ

第四十三條　精密手入ハ毎年概二回普通手入ニ關スル規定ヲ準用スルノ外左ノ各號ニ依リ之ヲ行ヒ要スレハ塗料ノ補修塗ヲ爲スヘシ

一　電鍵部ハ槓桿ヲ分解シ兩接點、槓桿軸及發條ヲ拭淨シタル後素鐵部及染烘部ニ時計油ヲ塗施スヘシ

二　驗電器ハ要スレハ分解シテ其ノ樞軸ヲ拭淨シ少量ノ時計油ヲ塗施スヘシ

三　繼電器ハ硝子蓋ヲ開キ清潔ナル刷毛又ハ筆ヲ以テ内外部ノ塵埃ヲ拭淨シ左ノ手入ヲ行フヘシ

イ　舌金ノ接點ハ接點螺子ヲ緩メ拭淨スヘシ舌金軸ハ尖鋭ナル木片ニ布片ヲ卷キ軸部ヲ損傷セサルコトニ注意シテ拭淨シタル後少量ノ時計油ヲ塗施スヘシ

ロ　機室ノ左前方ニ在ル調度螺子ハ之ヲ拭淨シテ時計油ヲ塗施スヘシ

四　印字機ノ手入左ノ如シ

イ　槓桿上下駐螺、接極子、電磁石及電磁石繼鐵ハ之ヲ拭淨シ要スレハ塗料ノ補修塗ヲ爲スヘシ

ロ　大發條軸、大發條軸駐子、壓車發條、紙滑桿及紙擦車ハ之

ヲ拭淨シ時計油ヲ塗施スヘシ

ハ　槓桿調度螺子、槓桿軸及槓桿臂（特ニ臂ノ先端ニ在ル印字車軸承部ノ毛入ニ注意スルヲ要ス）ハ機室ノ蓋鈑及側鈑ヲ脱シテ拭淨シタル後時計油ヲ塗施スヘシ

ニ　調速子ハ上部軸承ヲ脱シテ瑪瑙部及調速子ノ各部ヲ拭淨シ時計油ヲ塗施スヘシ

ホ　各車軸及軸承ハ其ノ蓋鈑ヲ開キ之ヲ拭淨シ時計油ヲ塗施スヘシ

ヘ　抽斗中、現字紙臺ノ樞軸部及屬品タル音信卷等ハ之ヲ拭淨シ素鐵部ニハ時計油ヲ塗施スヘシ

第二款　貯藏品ノ手入

第四十四條　普通手入ハ毎年一回雨期後ニ於テ常用品普通手入ニ準シ塵

埃、發黴及濕氣等ヲ拭淨スヘシ此ノ際脂油ハ通常塗換ユルコトナシ但シ毎年三、四回大發條ヲ卷キ印字機ヲ運轉セシメ脂油ノ凝固ヲ防クヘシ若凝固シタルモノアルトキハ精密手入ニ準シ之ヲ手入スヘシ

第四十五條　精密手入ハ毎年一回又ハ隔年一回乾燥期ニ於テ常用品精密手入ニ準シ之ヲ行フヘシ

第二節　格納

第四十六條　格納ノ方法ハ電鈴式電話機ノ格納ニ關スル規定ヲ準用スルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

一　貯藏品ハ驗電器指針及繼電器舌金ヲ壓定シ大發條ヲ弛緩シ轉把及墨汁壺ヲ脱シ槓桿ヲ壓定シ壓車ヲ起立セシメ現字機箱ニ納メ現字機覆ヲ施シ手入又ハ檢査ノ際容易ニ抽出シ得ル如ク間隔ヲ與ヘ

格納棚ニ整頓スヘシ

二　現字機箱中ニハ毛氈部防蟲ノ爲少量ノ「ナフタリン」（約半匁ヲ紙標準トス）ヲ包トシテ之ヲ收容シ毎年一回其ノ補塡ヲ爲スヘシ

第三節　檢　査

第四十七條　檢査スヘキ事項左ノ如シ

一　各部ノ機能良好ナリヤ

二　各部螺子ノ緊定度適當ナリヤ又螺子ノ紛失セルモノナキヤ

三　木部及其ノ他ニ闕損變歪セルモノナキヤ

四　塗料ノ剝脫セルモノナキヤ又塗料ヲ塗施シ非サル鐵部ノ防錆確實ナリヤ

五　前各號ノ外各部ノ手入良好ナリヤ

第四十八條　檢査ノ方法及檢査ニ當リ特ニ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　現字機主要部ノ機能檢査ヲ行フニハ電池ト接續線トヲ準備シ自習用接續（附圖第三圖）ヲ行ヒ電鍵ヲ上下シテ左ノ事項ヲ點檢スヘシ

イ　驗電器指針ノ運動銳敏ニシテ左方ニ偏斜スルヤ

ロ　繼電器舌金ノ運動銳敏、確實ニシテ左方接點ニ吸引セラルルヤ

ハ　電磁石接極子ノ運動確實ナリヤ

二　電鍵部ノ槓桿及「摘ミ」ハ遊動スルコトナキヤ兩接點ノ對應良好ナリヤ又接續線ノ螺定確實ナリヤ

三　驗電器指針ハ其ノ運動銳敏ナリヤ（指針ニ全傾斜ヲ與ヘ放置シタルトキ圓滑ナル振動ヲ爲シツツ少クモ左右ニ五回以上振動シタル後垂直ニ靜止スルヤ否ヤヲ檢スルモノトス）又指針ノ壓定及接續線ノ螺定確實ナリヤ

四　外線ノ接續螺子動搖スルコトナキヤ

五　繼電器ハ調度螺子ヲ以テ調整スルトキ駐螺坐ノ運動範圍適當ニ

シテ圓滑ナリヤ調度駐螺ニ於ケル白金接點ノ接觸正シキヤ舌金軸ノ摩擦少ク且損傷ナキヤ磁鐵ノ螺定確實ナリヤ又器室及蓋鈑ノ動搖スルモノ若ハ變歪セルモノナキヤ

六　印字機ハ左ノ事項ヲ點檢スヘシ

イ　機室動搖スルコトナキヤ

ロ　槓桿ノ運動圓滑ナリヤ又槓桿ハ機室ニ觸ルルコトナキヤ

ハ　印字車ヲ紙滑桿ニ觸レシムルトキ槓桿ノ位置ハ上下駐螺坐間ノ概中央ニ在リヤ

ニ　槓桿駐螺柱ノ固定確實ナリヤ

ホ　電磁石匡及各電磁石ノ動搖スルモノナキヤ

ヘ　電磁石ノ極鐵ニ磁氣ノ殘留セルコトナキヤ（磁氣ナキ螺廻等ノ鐵類ヲ接觸セシメ之ヲ檢スヘシ）

ト　槓桿調度螺筒ノ固定確實ナリヤ又其ノ調度螺子ノ機能良好ナリヤ（調度螺子ヲ充分緩メタルトキ尚僅ニ槓桿ヲ上方ニ牽引シアルヲ可トス）

チ　電磁石調度螺子ノ緊定確實ニシテ動搖スルコトナキヤ又調度ノ範圍適當ナリヤ

リ　大發條ノ捻廻數（七回以上ナルヲ可トス）適當ナリヤ

ヌ　駐輪ト駐子トノ嚙合確實ナリヤ又駐子ノ摩擦少キヤ

ル　印字機匡内各部ノ運動平滑ニシテ雜音又ハ噪音ナキヤ特ニ調速子永轉螺ノ嚙合適當ナリヤ

オ　齒輪ニ闕損ナキヤ各齒輪軸ハ僅ニ左右ニ移動シ得ル餘裕アリヤ

ワ　回轉制定桿ノ作用確實且平滑ナリヤ

カ　紙擦車及紙滑桿ノ回轉容易ナリヤ

ヨ　壓車發條ノ彈力適當ナリヤ又壓車ノ壓定ニ偏倚ナキヤ

タ　印字車軸及印字輪ノ運動偏倚スルコトナキヤ

レ　墨汁壺ハ其ノ位置ニ適當ニ裝著シアリヤ又拭淨良好ナリヤ

ソ　現字紙臺ノ保定及回轉良好ナリヤ

七　屬品タル避雷器雲母板ニ闕損ナキヤ又塞流線輪及紐栓ノ導通良好ナリヤ

第四十九條　各部ノ感度其ノ他ニ關シ精密ナル檢査ヲ要スル場合ニ在リテハ左ノ各號ニ依ルヘシ

一　驗電器ノ感度良好ナリヤ（機能完全ナルモノニ在リテハ一「ミリアンペーア」ノ電流ニテ感動シ尚八「ミリアンペーア」ノ電流ニテ指針全傾斜ヲ爲スモノトス）

二　繼電器ノ感動及感動幅良好ナリヤ（機能完全ナルモノニ在リテハ最小感度〇、三「ミリアンペーア」以下ニシテ感動幅ハ最小感度ニ於テ二〇以上ナルモノトス）

三　電磁石ノ感度及感動幅良好ナリヤ（機能完全ナルモノニ在リテハ最小感度二五「ミリアンペーア」以下ニシテ感動幅ハ最小感度ニ於テ四以上ナルモノトス）

四　現字紙繰出速度適當ナリヤ（機能完全ナルモノニ在リテハ一分時ニ於テ二米五〇乃至三米五〇ニシテ毎分時著シク遲速ナキモノトス）

第四節　分解及結合

第五十條　分解及結合ハ左ノ部分ニ限リ之ヲ行フコトヲ得此ノ分解及結合ハ將校監督ノ下ニ下士又ハ技術熟練ノ兵卒ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ

一　電鍵部ノ槓桿

二　驗電器ノ頂鈑

三　繼電器ノ外筒

四　印字機ノ紙擦車、調速子及各軸承ノ蓋鈑

第五十一條　分解及結合ノ方法左ノ如シ

一　電鍵部ハ槓桿軸駐螺及蛇線發條駐螺ヲ脱シ槓桿軸ヲ拔キ徐ニ槓桿ヲ脱スヘシ

二　繼電器ノ外筒ハ前方下部ニ在ル小駐螺ヲ脱シ外筒ヲ少シク回轉シ徐ニ上方ニ脱スヘシ

三　印字機ノ調速子ヲ分解スルニハ大發條ヲ弛緩シタル後印字機ノ頂鈑及左側鈑ヲ拔キ上部軸承ノ駐螺ヲ脱シ瑪瑙ヲ落下セシメサルコトニ注意シテ軸承ヲ取リ外シ調速子全部ヲ少シ上方ニ上ケツツ離脱スヘシ

第五節　取扱上ノ注意

第五十二條　電鍵ノ「摘ミ」ハ之ヲ旋回シ若ハ之ヲ以テ機械ヲ移動シ又ハ

他物ニ衝突セシムヘカラス

第五十三條　驗電器、繼電器及印字機ニ在ル小螺子ハ紛失セサル如ク緊定シ置クヘシ

第五十四條　繼電器ニ關シ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　硝子蓋ノ緊密程度ハ稍強キ抵抗力ヲ感スルヲ度トシ運搬中自然ニ開放スルコトナカラシムヘシ

二　硝子蓋ヲ開閉スルニハ徐ニ之ヲ行ヒ蝶番又ハ側緣ヲ破損セサルコトニ注意スヘシ

三　舌金ノ螺定其ノ他舌金ノ取扱ニ當リテハ其ノ軸部ヲ損傷セサルコトニ注意スヘシ

四　運搬前後ニハ特ニ舌金、器坐及外筒ヲ緊定スルコトニ注意シ要スレハ之ヲ螺定スヘシ

現字機　取扱上ノ注意

第五十五條　印字機ニ關シ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　槓桿調度發條ノ彈力ヲ點檢スルニ當リテハ指頭ヲ槓桿上ニ置キ徐ニ之ヲ壓下スヘシ

二　墨汁ヲ墨汁壺ニ容ルルトキハ墨汁壺ヲ取リ外シ又墨汁壺ヲ彼此交換セサルコトニ注意スヘシ

三　壓車ヲ急激ニ降下シ又ハ現字紙ヲ挾ムコトナクシテ壓車ヲ降下シ印字機ヲ回轉セシムヘカラス

四　使用後ニ於テハ壓車ヲ起立セシメ回轉制定桿ヲ弛メ大發條ヲ自然ニ弛解セシムヘシ

五　運搬前後ニハ特ニ槓桿、電磁石匡及印字機匡ノ固定シアルコトニ注意スヘシ

第五十六條　現字機ヲ箱内ニ收容スルニハ大發條ヲ弛解シ驗電器指針ヲ

壓定シ壓車ヲ起立シ現字機轉把ヲ離脫シ且箱内ニ在ル抽斗類ノ位置ノ正シキヤヲ確メ徐ニ現字機ヲ挿入シ轉把差ニ收メ之ヲ箱内所定ノ位置ニ挿入スヘシ

第五十七條　現字機箱ニ於ケル前蓋板ヲ閉ツル爲之ヲ抽出スルニハ蓋板兩側ニ在ル突筍ヲシテ支駐鈑ニ衝突セシメサル如ク徐ニ之ヲ行フヘシ

第五章　電槽

第一節　手入

第五十八條　常用品ノ手入ハ左ノ如シ

一　接續螺子、接續線、電瓶ノ隔障及電槽箱ノ底部ハ之ヲ拭淨シテ濕氣、塵埃及汚垢等ヲ除去スヘシ

二　基鈑ハ之ヲ電瓶ヨリ出シ清水中ニ入レ徐ニ之ヲ振盪シ其ノ鈑面

ニ附著セル沈澱物ヲ去リ刷毛ヲ以テ基鈑ヲ拭淨シタル後直ニ電液中ニ浸スヘシ（空氣中ニテ之ヲ乾燥スルカ如キコトアルヘカラス）若沈澱物附着シテ容易ニ除去シ能ハサルトキハ左ノ方法ニ依リ之ヲ除去スヘシ

イ　亞鉛基鈑ハ布鑢ヲ以テ沈澱物ヲ除去スヘシ

ロ　銅基鈑ハ布鑢又ハ稀硫酸（硫酸一水一〇ノ比）ヲ以テ沈澱物ヲ除去スヘシ

稀硫酸ハ成ルヘク少量ヲ用ヰ又之ヲ使用シタルトキハ基鈑ヲ清水ニテ充分洗滌シ酸類ヲ殘留セシメサルヲ要ス

第五十九條　貯藏品ハ毎年概一回塵埃及汚垢等ヲ拭ヒ特ニ銅基鈑ヲ拭淨シ要スレハ基鈑、接續螺子等ニ於ケル塗料ノ補修塗ヲ行フヘシ又亞鉛基鈑甚シク變色シタルトキハ汞化替ヲ行フ爲修理ノ手續ヲ爲スヘシ

第二節　格納

第六十條　格納ノ方法左ノ如シ

一　電瓶ノ上蓋及接續線ハ其ノ組毎ニ之ヲ一括トシ電瓶ト共ニ電槽箱内ニ收メ格納スヘシ但シ電槽箱前面ノ開閉板ハ其ノ凝著、闕損ヲ避クル爲之ヲ開キタル儘格納スルモノトス

二　基鈑ハ電瓶ヨリ分離シテ之ヲ格納スヘシ

第六十一條　一時的格納ノモノハ手入後基鈑ヲ電液中ニ浸シ接續螺子ヲ短絡スルコトナク且「パラフイン」油（透明無色又ハ殆ト無色ノ油狀ノ液ニシテ臭味ナク螢石彩ヲ有セス比重〇、八七五乃至〇、九四五ノモノタルヘル以下同シ）ヲ上蓋ト中蓋トノ間ニ充實シアルコトニ注意シテ格納スヘシ

第三節　檢査

第六十二條　常用品檢査ニ關スル注意事項左ノ如シ

電槽　格納　檢査

一　電瓶ハ規定ノ電力ヲ有スルヤ（機能完全ナルモノニ在リテハ電壓〇、八「ボルト」電流二「アンペーア」以上ナルモノトス）

二　基鈑ノ上面ハ苛性加里液中ニ充分浸入シアルヤ又「パラフイン」油ノ充塡充分ナリヤ

三　兩基鈑内部ニ於テ短絡セルコトナキヤ又沈澱物甚シク附著セルコトナキヤ特ニ銅基鈑清潔ニシテ且機能良好ナリヤ（小刀類ヲ以テ酸化銅塊ノ内部ヲ檢スルニ其ノ外部ノミ赤色ヲ呈スルモノハ尚多少効力ヲ有スルモノニシテ内部ニ至ル迄赤色ヲ呈スルモノハ既ニ其ノ効力ヲ失ヒタルモノトス）

四　電瓶ハ漏液スルモノナキヤ

五　電瓶及接續螺子ノ拭淨充分ナリヤ

第六十三條　貯藏品檢査ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　銅基鈑ハ清潔ナリヤ又亞鉛基鈑ハ甚シク變色セルモノナキヤ

二　基鈑及接續螺子ハ毀損又ハ變歪セルモノナキヤ

三　接續螺子牝螺、接續螺子牡鈑及接續線等ノ紛失セルモノナキヤ

第四節　取扱上ノ注意

第六十四條　電瓶及電瓶中蓋ノ「エボナイト」螺絲部ハ特ニ毀損セシメサルコトニ注意スヘシ

第六十五條　箱ノ前面ニ在ル開閉板ノ溝部ハ開閉ニ當リ闕損セシメサルコトニ注意スヘシ

第六十六條　新ニ電瓶ノ組立ヲ行フニハ基鈑ヲ豫メ清水ニテ潤シ其ノ乾燥セサル間ニ電液中ニ浸入セシムヘシ

第六章　乾電池

第六十七條　乾電池ハ其ノ内部ニ於ケル糊狀物ノ化學的作用ヲ惹起スルコトヲ防キ且糊狀物ヲ乾燥セシメサルコトニ注意シテ保存スヘシ

第六十八條　乾電池ハ寒冷ニシテ濕氣ヲ帶ヒ空氣ノ流通少キ位置ヲ選ミ且日光ヲ遮蔽シ噴氣孔ヲ閉塞セサルコトニ注意シテ格納スヘシ特ニ夏季ニ於テハ床下ニ格納スルヲ可トス

第六十九條　乾電池ノ檢査ニ當リ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　乾電池ハ其ノ機能良好ナリヤ新品ノ小乾電池甲ハ電壓一、四五「ボルト」以上電流五「アンペーア」以上ヲ有シ新品ノ小乾電池乙ハ電壓二、九「ボルト」以上電流五「アンペーア」以上ヲ有スルモノトス但シ小乾電池甲ハ電壓ノ一、二「ボルト」以上電流三〇〇「ミリアンペーア」以上小乾電池乙ハ電壓二、四「ボルト」以上電流三〇〇「ミリアンペーア」以上ナルトキハ充分使用ニ堪ユルモノトス又小乾電池甲ハ電壓一、〇「ボルト」以上電流一五〇「ミリアンペーア」以上小乾電池乙ハ電壓二、〇「ボルト」以上電流一五〇「ミリアンペーア」以上ナルトキハ一時ノ使用ニ堪ユルモノトス

二　電流ヲ檢スルニハ短時間ノ接續ニ於テ測定ヲ終ルコトニ注意スヘシ

第七十條　乾電池取扱上ノ注意左ノ如シ

一　乾電池ヲ受領スルニ當リテハ前條第一號ノ檢査ヲ行ヒ其ノ受領年月日及電壓、電流ヲ現品ニ標記シ爾後毎年夏季前後ニ於テ電壓、電流ヲ測定シ其ノ使用ニ堪エサルモノハ之ヲ處理スヘシ

二　良好ナル乾電池ニシテ其ノ格納方法適當ナルモノハ製作後一箇年以上完全ナル電力ヲ保持スルモノトス

通常電話ニ使用スルモノハ少クモ六箇月間ハ充分實用ニ適スヘキ電力ヲ保持スルモノトス

三　乾電池ノ消耗ハ使用中ニ於ケルヨリモ格納ノ不良及取扱ノ不注意ヨリ生スル短絡又ハ使用ノ拙劣等ニ基因スルコト多キヲ以テ特ニ注意スヘシ

四　嚴寒ノ爲内部ノ糊狀物氷結シタルトキハ一時電力ヲ失フコトアルモ徐ニ之ヲ温ムルトキハ電力ヲ恢復スルコトヲ得ルモノトス

第七章　被覆線

第一節　手入

第七十一條　常用品ノ手入ハ左ノ如シ

一　塵埃、土砂ノ附著シタルトキハ乾布又ハ雑巾ヲ以テ之ヲ拭淨スヘシ

二　雨雪等ノ爲濕潤シタルトキハ日光ノ直射ヲ避ケ空氣ノ流通良好ナル場所ニ於テ左ノ方法ニ依リ之ヲ乾燥スヘシ

イ　適當ノ間隔（成ルヘク間隔ノ大ナルヲ良トス）ヲ存シテ杭又ハ柱等ヲ樹テ之ニ架設作業ノ方法ニ依リ被覆線ヲ延長シ疎散ニ纏囘シテ乾燥スヘシ此ノ際土砂ヲ附著セシメサルコト及纏囘部ニ損傷又ハ綰結ヲ生セシメサルコトニ注意スヘシ之ヲ卷キ取ルニハ撤收作業

ノ方法ニ依ルヘシ

ロ　卷替絡車（規定ノ絡車胴ニ纏卷セル捲形ニ比シ其ノ中徑ヲ大ニシ高サヲ減少シタル捲形（內徑約二〇糎高サ約一〇糎ヲ便トス）ニ卷キ替ヘ得ル如キ適宜ノ補助絡車ヲ謂フ）ニ卷キ替ヘタル後該絡車ヲ分解シテ捲線ヲ離脫シ之ヲ一箇所ニ於テ結束シ其ノ結束セサル部分ヲ疎開シテ之ヲ乾燥スヘシ

三　被覆線ニ土砂附著シタルトキハ他ノ絡車ニ卷キ替ヘツツ濕潤セル布片ヲ以テ拭ヒ更ニ乾燥布片ヲ以テ之ヲ拭淨スヘシ若土砂ノ附著甚シクシテ容易ニ之ヲ拭淨シ能ハサルトキハ短時間淸水中ニ浸シテ之ヲ洗滌シ（絕緣檢査ノ時期ヲ利用スルヲ可トス）前各號ニ依リ手入ヲ行フヘシ

四　塗料剝脫シテ外部ノ被覆露出シタルトキハ第九十一條ニ依リ塗料ノ塗替又ハ補修塗ヲ行フヘシ

第七十二條　貯藏品ハ乾燥セル布片ヲ以テ塵埃及發黴ヲ拭淨シ要スレハ

塗料ヲ塗施スヘシ

第二節　格納

第七十三條　格納ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　比較的寒冷ニシテ温度ノ變化成ルヘク少ク且濕潤セサル位置ニ格納シ濕潤、温暖ノ期節ニ在リテハ戸外ノ乾燥セル日ニ於テ時時、窓戸ヲ開キ格納箱ノ蓋又ハ覆ヲ除キ空氣ノ流通ヲ計ルヘシ

二　被覆線ヲ纏卷スルニハ捲線ヲ成ルヘク平行ナラシメ交錯又ハ綰結部ヲ生セシムヘカラス

三　中被覆線及小被覆線ノ接續器ハ特ニ其ノ凸起部ニ注意シ接續器ヲ綿帶ノ類ヲ以テ被包スヘシ但シ日日使用スル接續器ニハ之ヲ行フコトナシ

四　中絡車胴及小絡車胴ニ附著セル緣金ヨリ生スル被覆線ノ損傷ヲ豫防スル爲外部ノ結束ヲ確實ニスヘシ又被覆線ヲ格納スルニ當リ柔軟ナル布ヲ敷キ之ヲ保護スヘシ

五　堆積數ハ成ルヘク其ノ數ヲ僅少ナラシムヘシ其ノ堆積數ノ最大限ハ大被覆線ニ在リテハ四層中被覆線ニ在リテハ二層小被覆線ニ在リテハ五層ヲ標準トスヘシ但シ大被覆線ヲ三層以上堆積格納シタルトキハ毎年一回其ノ堆積層ヲ轉換スヘシ

第七十四條　常用品ヲ格納スルニハ前條ニ依ルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

但シ一時使用セサルモノハ第七十五條ニ準スルモノトス

一　中被覆線及小被覆線ハ規定ノ絡車又ハ絡車胴ニ纏卷シ之ヲ綿帶類ヲ以テ結束シテ格納スヘシ

二　大被覆線ハ架設胴ニ適應スル捲形（内徑約二三糎　高サ約一三糎）トシ之ヲ平置スヘ

シ

第七十五條　貯藏品ヲ格納スルニハ第七十三條ニ依ルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

一　中被覆線及小被覆線ハ規定ノ絡車胴ニ纏卷シ綿帶類ヲ以テ四箇所ニ於テ之ヲ結束シ麻布製袋ニ收容シ又ハ麻布帶ヲ以テ之ヲ被包シ絡車胴ヲ直立セシムル如ク格納スヘシ

二　大被覆線ハ前條第二號ト同樣ノ捲形トシ麻布帶ヲ以テ之ヲ被包シ平置スヘシ

第三節　檢　査

第七十六條　檢査スヘキ事項左ノ如シ

一　心線ノ導通及被覆ノ絶縁良好ナリヤ

二　接續器ノ作用完全ナリヤ特ニ其ノ相互ノ接續作用及接續器ト心線トノ接續確實ナリヤ

三　捲形ノ保持適當ニシテ架設胴又ハ絡車ニ裝著シ得ルヤ

四　被覆ニ發黴、破損又ハ綰結部ナキヤ

五　塗料ノ剝脫セルコトナキヤ又各部ノ修理適當ナリヤ

第七十七條　心線ノ導通檢査方法左ノ如シ

一　完全ナル電話機ヲ裝置シ其ノ接續螺子ニ檢査スヘキ被覆線ノ兩端ヲ接續シ押釦ヲ押ヘ送話口ニ向ヒ音聲ヲ發シ受話器ニ明瞭ニ感スルヤヲ檢スヘシ（明瞭ニ感スルトキハ導通完全ナルモノトス）

二　被覆線、電池及懷中電壓電流計又ハ驗電器ヲ直列ニ接續シ電流計若ハ驗電器ノ指針偏斜スルヤヲ檢スヘシ（指針偏斜スルトキハ導通完全ナルモノトス）

第七十八條　被覆ノ絶縁檢査方法左ノ如シ

一　被覆線ヲ水槽中ニ入レ其ノ水槽中ノ一端ヲ絶縁シ他ノ一端ヲ完全ナル電話機ノ一接續螺子ニ接續シ他ノ接續螺子ヨリ水槽中ニ小地棒又ハ銅線ヲ以テ地線ヲ取リ押釦ヲ押ヘ送話器ニ向ヒ音聲ヲ發シ受話器ニ感スルコトナキヤヲ檢スヘシ（絶縁良好ナルモノハ全ク受話器ニ感セサルモノトス）

二　絶縁抵抗測定器ヲ有スルトキハ前號ト同方法ニ依リ被覆線ヲ水槽中ニ入レ其ノ一端ヲ絶縁シ他ノ一端ヲ測定器接續螺子ノ「本線」ニ接續シ他ノ「地線」ノ接續螺子ヨリ水槽中ニ地線ヲ取リ測定器ノ電路轉換器ヲ「絶縁」ノ方ニ接シ轉把ヲ回轉シ指針ノ靜止スル分畫ヲ讀算シ又別ニ水ノ固有抵抗ヲ測定シ之ヲ除控スヘシ（絶縁完全ナルモノニ在リテハ大被覆線及中被覆線ニ於テ五〇〇「メグオーム」以上小被覆線ニ於テ一「メグオーム」以上ヲ有スルモノトス又演習用ノ爲ニハ大被覆線及中被覆線ニ於テ一〇〇「メグオーム」以上小被覆線ニ於テ二〇〇〇「オーム」以上マテノモノヲ使用スルコトヲ得ルモノトス）

第四節　取扱上ノ注意

第七十九條　絡車ノ輪鈑及駐螺ハ常ニ緊定ヲ確實ナラシメ被覆線ヲ絡車胴ト輪鈑トノ間ニ挾マサルコトニ注意スヘシ

第八十條　卷替作業ハ已ムヲ得サル場合ノ外成ルヘク之ヲ行ハサルコトニ注意スヘシ

第八十一條　卷替ヲ行フニハ左ノ各號ニ注意スヘシ

一　輪鈑及駐螺ノ緊定ニ關シテハ第七十九條ニ依ルヘシ

二　卷替速度ハ急激ヲ避ケ特ニ回轉ノ餘力ニ因リ繰リ出サレタル線條ヲ一箇所ニ集結シ又ハ線條ヲ輪鈑外ニ脫セシメ若ハ之ヲ緊張スル等ノコトナキ樣注意スヘシ

三　綰結ヲ生シタルトキハ其ノ儘之ヲ延伸スルコトナク綰結ヲ反對

ニ振廻シ要スレハ其ノ局部ニ於ケル絶縁ヲ檢スヘシ

四　卷キ取リタル線條ハ絡車胴ノ全部ニ平等ニ纏卷シ且成ルヘク之ヲ平行ナラシムヘシ

五　外方ノ接續器ハ綿帶類ヲ以テ被包シタル後捲線ノ弛緩又ハ接續器ノ遊動セサル如ク捲體ニ結束シ置クヘシ

第八十二條　被覆線ヲ移動又ハ運搬スルニ當リ其ノ捲形ヲ弛解セシメサルコトニ注意スヘシ

移動又ハ運搬後要スレハ卷替ヲ行ヒ其ノ捲形ヲ完全ナラシムヘシ

第五節　修理方法ノ概要

第八十三條　各種被覆線ニ於ケル斷線、被覆局部ノ破損及接續器ノ接續ハ實用ニ耐ユル如ク軍隊ニ於テ修理ヲ行フヘシ此ノ際心線ノ導通特ニ被覆ノ絶縁ヲ檢スヘシ若絶縁不良ナルトキハ其ノ不良箇所ヲ探究シテ更ニ之ヲ修理スヘシ

第八十四條　心線ヲ接續スルニハ其ノ接點ヲ强固ナラシムルコト及電氣ノ導通ヲ良好ナラシムルコトニ注意シ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フヘシ

一　切斷部兩端末ニ於ケル被覆約五糎ヲ剝キ心線特ニ銅線ヲ布鑢ヲ以テ充分ニ研磨シ銅線ヲ捻リ合ハセ其ノ外部ニ鋼線ヲ組合ハセ其ノ接續部ノ中央ヲ二條ノ併列セシメタル接續用銅線（三十番銅線）ノ中央部ヲ以テ卷キ始メ左側ニ向ヒ平行ニ密接セシメツツ約四、五回堅ク之ヲ卷キタル後鋼線二條又ハ三條ノ內側ヲ通シテ二、三回之ヲ卷キ次ニ全心線ノ外側ヲ二、三回卷キ更ニ同方法ニ依リ前ト異ナル鋼線二條又ハ三條ノ內側ヲ通シ最後ニ全心線ノ外側ヲ四、五回卷キ接續用銅線ノ端末ヲ堅ク纏卷シテ緊締スヘシ又更ニ同方法

ニ依リ接續部ノ右側ヲ卷キタル後接續用銅線ヲ以テ纏卷シタル部分ヲ銲著スヘシ（附圖第四圖）

二　銲著材料ヲ有セサル場合及野外ニ於ケル一時ノ應急修理方法ハ通信敎範ニ依ルヘシ

第八十五條　被覆ヲ修理スルニハ其ノ絶緣ヲ良好ナラシムルコト及其ノ修理シタル部分ヲ凸起セシメス且表面ヲ平滑ナラシムルコトニ注意シ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フヘシ

一　大被覆線及中被覆線ノ完全ナル部分約一糎ヲ露出セシムル如ク亞麻被覆ヲ扱キ纏メ半幅ニ切斷ル護謨綿帶（粘著性ノ强キモノヲ用ウヘシ）ヲ充分ニ密接セシメ且成ルヘク平行ニ其ノ半幅ヲ重複スル如ク卷キ纏卷ノ兩端ハ露出セシメタル護謨被覆部ヲ被包スル如ク下卷ヲ爲シ次ニ扱キ纏メタル亞麻被覆ヲ延ハシ其ノ上部ヨリ護謨綿帶ヲ下卷ト反對方向ニ卷キ修理部ノ兩端ヲ完全ナル部分約二糎ヲ覆フ如ク被包シテ上卷ヲ行ヒ其ノ兩端ヲ一枚麻絲ヲ以テ堅ク四、五回纏卷シテ結束スヘシ

二　大被覆線及中被覆線ノ護謨被覆完全ナルモノニ單ニ亞麻被覆ノミノ修理ヲ行フ場合ハ前號ノ方法ニ依リ上卷ノミヲ爲シ麻絲ヲ以テ結束スヘシ

三　小被覆線ノ被覆ヲ修理スルニハ約三分ノ一ノ幅ニ切斷セル護謨綿帶ヲ以テ第一號ニ示セル上卷ノ方法ニ依リ纏卷シ兩端ヲ麻絲ニテ結束スヘシ

第八十六條　被覆ニ目睹シ能ハサル漏電部アルトキハ左ノ方法ニ依リ其ノ箇所ヲ探究シ之ヲ修理スヘシ

一　完全ナル電話機及水槽（附圖第五圖）ヲ準備シ被覆線ノ一端及地線（小地棒又）

ハ鋼線ヲ用ウ ヲ電話機ニ接續シ被覆線ヲ絶縁シアル一箇ノ絡車ヨリ水槽中ヲ通シ他ノ絶縁シアル絡車ニ卷キ替ヲ爲スト同時ニ送受話器ノ押釦ヲ押ヘ絶エス送話口ニ向ヒ音聲ヲ放ツトキ不良部ヲ有スル被覆ニ在リテハ受話器ニ音聲ヲ感スルモノトトナシ（被覆完全ナルトキハ受話器ニ何等音聲ヲ感スルコトナシ）

二　絶縁抵抗測定器ヲ有スルトキハ前號ノ電話機ニ代ユルニ絶縁抵抗測定器ヲ以テシ轉把ヲ囘轉シツツ前號ト同方法ニ依リ被覆線ノ卷キ替ヲ爲シ指針ノ偏斜ニ依リ不良部ヲ探究スヘシ

第八十七條　中被覆線ト接續器トヲ接續スルニハ左ノ方法ニ依ルヘシ

一　中被覆線ノ一端ニ於テ被覆約一〇糎ヲ剝キ被覆部ノ端末ハ剝脫ヲ防ク爲麻絲ヲ以テ四、五囘纏卷シテ結束シ次ニ心線ヲ研磨シ其ノ全部ヲ接續器ノ脚線孔ニ挿入シ銅線ヲ殘シ鋼線ノ全部ヲ脚線溝ニ沿ヒ成ル可ク密接スル如ク屈折シ次ニ二條ノ併列シタル接續用銅線（三十番銅線）ヲ以テ第八十四條ニ依リ接續シ更ニ適宜接續部ヲ牽引シタル後心線タル銅線ヲ脚線ニ纏卷シ該部及接續用銅線ヲ以テ纏卷セル部分ヲ銲著スヘシ（附圖第六圖甲）心線ヲ接續シタル後護謨綿帶ヲ以テ被覆線ノ被覆部ノ一端約二糎ヲ覆ヒ他ノ一端ハ自然ニ外筒ノ高サニ至ル迄卷キ尙外筒ノ上方約一糎ヲ覆フ如ク二囘纏卷シ更ニ黑色ニ塗リタル綿帶ヲ以テ二囘纏卷シ其ノ兩端ヲ麻絲ヲ以テ七、八囘纏卷シテ堅ク結束シ尙爲シ得レハ黑色防濕塗料ヲ塗施スヘシ（附圖第六圖乙）

二　銲著材料ヲ有セサル場合又ハ野外ニ於ケル修理方法ハ前號ニ依リ心線ノ鋼線全部ヲ脚線溝ニ沿ヒ屈折シ三十番銅線ヲ以テ緊縛シ鋼線ヲ二條又ハ三條宛順次ニ線身ニ纏卷シ餘端ヲ三十番銅線ヲ以

テ緊縛シ其ノ上部ハ護謨綿帶ノミヲ纏卷スヘシ

第八十八條　小被覆線ト小接續器トヲ接續スルニハ被覆線ノ端末約二糎ノ被覆ヲ剝脫シ被覆部約二糎ヲ麻絲ヲ以テ密接ニ纏卷シ心線ヲ研磨シ發條內側ヲ經テ小接續器ノ孔ニ挿入シ心線頭部ヲ同孔ノ外部ニ突出セサル如クシ其ノ孔ノ部ニ於テ「チノール」絲盤陀ヲ以テ銲著シ平鑢ヲ以テ之ヲ平滑ナラシムヘシ　附圖第七圖

第八十九條　中接續線及小接續線中接續器ト反對側ニ在ル端末ノ修理ハ約四糎ノ被覆ヲ剝脫シ被覆ノ端末ハ麻絲ヲ以テ結束シ心線ノ端末ハ三十番銅線ヲ以テ約五、六回卷キ其ノ部ヲ銲著スヘシ

第九十條　大被覆線ノ端末ヲ修理スルニハ被覆部六糎ヲ剝脫シ線端ニ三十番銅線ヲ纏卷シテ圓臺部ヲ作リ其ノ上ニ盤陀ヲ施シ鑢ヲ以テ規定ノ寸度ニ削リ又被覆ノ端末ハ麻絲ヲ以テ長サ約二五粍ヲ緊ク結束シ

附圖第八圖

第九十一條　接續管ニ挿入シ接續ノ適否ヲ檢スヘシ

一　塗換ヲ行フニ先チ汚垢、土砂及塵埃等ヲ拭淨シ且充分乾燥セシムヘシ

二　黑色防濕塗料ヲ攝氏八〇度乃至一〇〇度ノ溫度ヲ以テ熔解シ一〇〇度以上ニ昇騰セシメサルヲ要ス被覆線ヲ其ノ一端ヨリ順次熔解セル塗料中ヲ通過セシメタル後被覆ノ表面ニ附著セル塗料ノ過剩分ヲ布片ヲ以テ除去シタル後絡車ニ第一回ノ卷替ヲ行ヒ次ニ他ノ絡車ニ第二回ノ卷替ヲ爲シツツ乾燥セル布片ヲ以テ摩擦シ其ノ表面ヲ平滑ナラシムヘシ

三　塗料ヲ塗施シタルモノハ其ノ表面平滑ニシテ厚薄ナク其ノ附著力强キヲ要ス之レカ爲ニ塗施前ニ於ケル被覆線ノ拭淨、塗料ノ品

質、塗料ノ熔解温度、卷替速度（接續部ナキ被覆線五〇〇米ニ就キ約十五分ヲ標準トス）塗料附著程度（被覆線一把ニ就キ大被覆線ニ在リテハ約一〇〇匁小被覆線ニ在リテハ約二五匁ノ塗料ヲ附著セシムルヲ標準トス）及塗施後ノ摩擦等ニ特ニ注意スヘシ

四　局部ノ補修塗ヲ行フニハ防濕塗料ヲ附著セル布片ヲ温メ之ヲ以テ被覆ヲ摩擦スヘシ

第八章　護謨類被覆線ヲ除ク

第一節　手入

第九十二條　護謨類ノ手入ハ左ノ方法ニ依ルヘシ

一　軟化及粘著スルノ虞アルモノ又ハ軟化粘著ニ傾キタルモノハ滑石即チ「タルク」類ヲ其ノ表面ニ塗布スヘシ

二　濕潤セルモノハ日光又ハ火氣ヲ以テ乾燥スルコトナク之ヲ蔭乾スヘシ

三　氷結セルモノハ延伸又ハ屈折セサルコトニ注意スヘシ

第二節　格納

第九十三條　格納ハ左ノ方法ニ依ルヘシ

一　比較的寒冷（護謨ノ氷結セサル程度ヲ可トス）ニシテ成ルヘク温度ノ變化僅少ナル場所ニ格納シ且庫内ニ濕熱ノ空氣ヲ滯留セシメサルコトニ注意スヘシ之レカ爲夏季ニ在リテハ外氣ノ乾燥セル時期ヲ選ミ時時、窓戸及格納容器ノ蓋ヲ開キ空氣ヲ流通セシムヘシ

二　格納中壓迫又ハ屈折セシメサルコトニ注意スヘシ

三　護謨及「エボナイト」ノ格納ニ於テ光線ヲ遮斷スルコト困難ナル場合ニ在リテハ黄色又ハ黑色（黄色ヲ最良トス）ノ被包物ヲ以テ覆フヲ可トス

第三節　檢　査

第九十四條　檢査ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　光線ノ遮斷ニ關スル處置適當ナリヤ

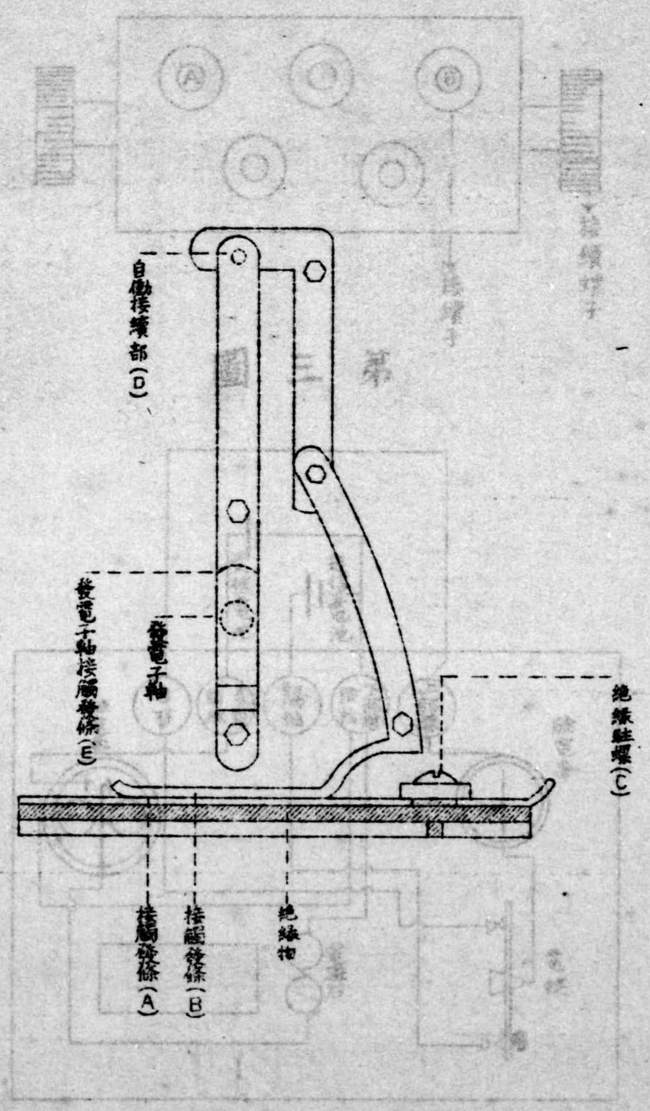
二　發黴又ハ白粉狀ノ發生物ナキヤ

三　彈力適當ナリヤ（通常延伸又ハ壓迫シテ之ヲ判別スルコトヲ得）

四　硬化、龜裂及軟化セルモノナキヤ又粘著性ヲ有スルモノナキヤ

第二圖

第一圖



第三節　檢査

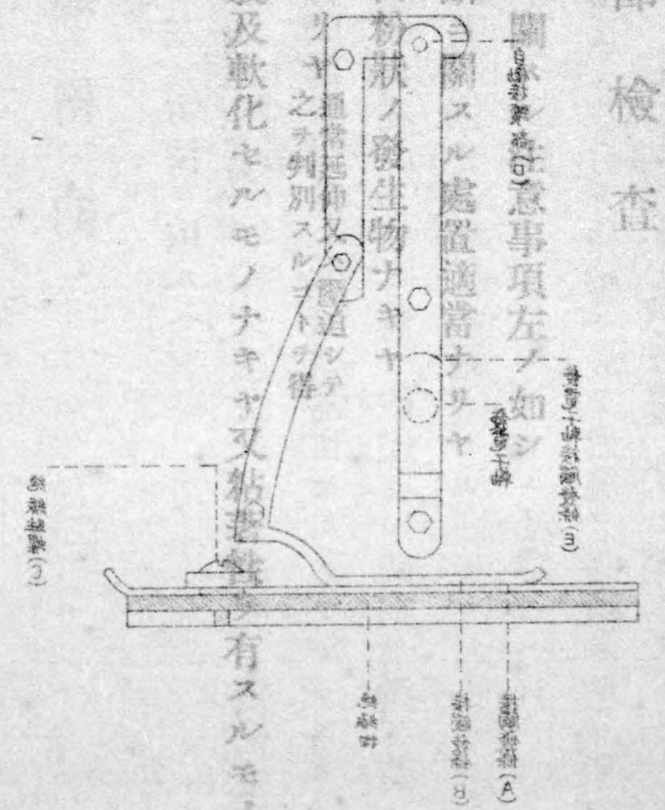
第九十四條　檢査ニ關スル注意事項左ノ如シ

第一圖　光線ノ進路ニ關スル處置適當ナルヤ

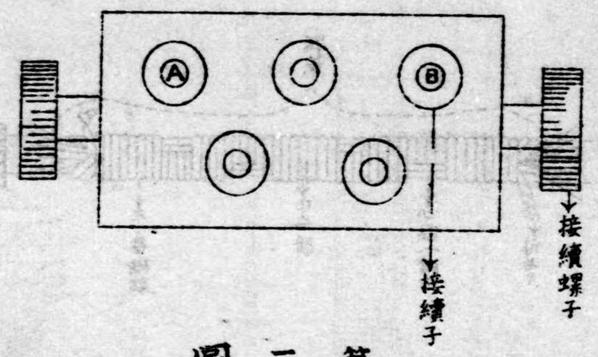
二　發微又ハ自然ノ發生物ナキヤ

三　彈力適當ナリヤ　之ヲ判別スルヲ要ス

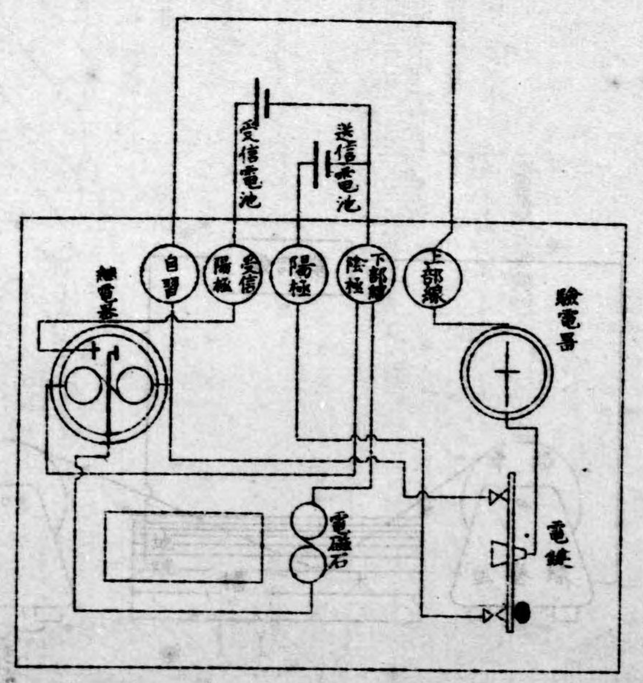
四　硬化、龜裂及軟化セルモノナキヤ又粘着性ヲ有スルモノナキヤ



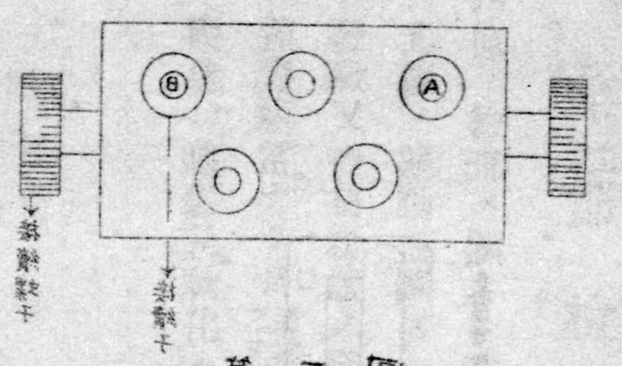
第二圖



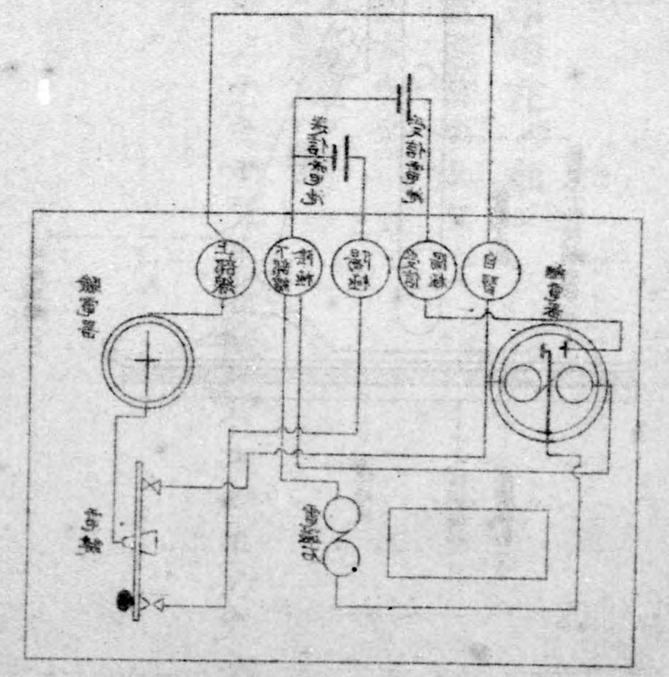
第三圖



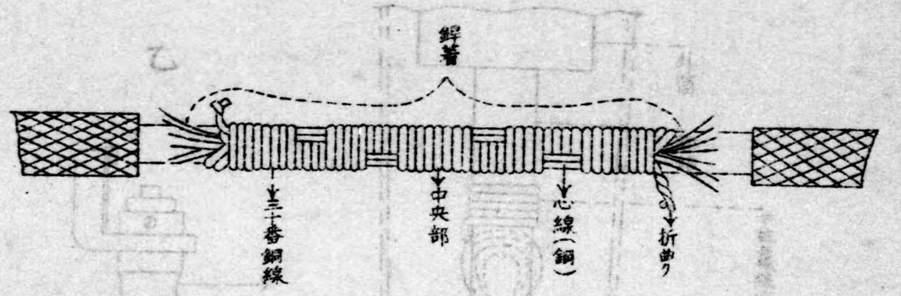
第二圖



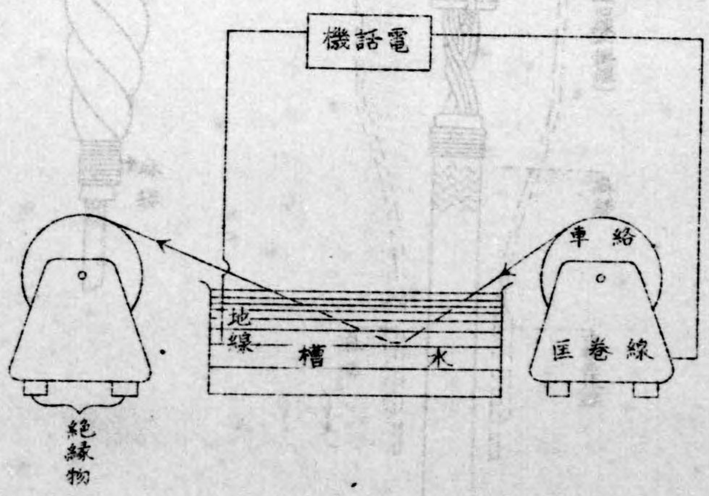
第三圖



第四圖



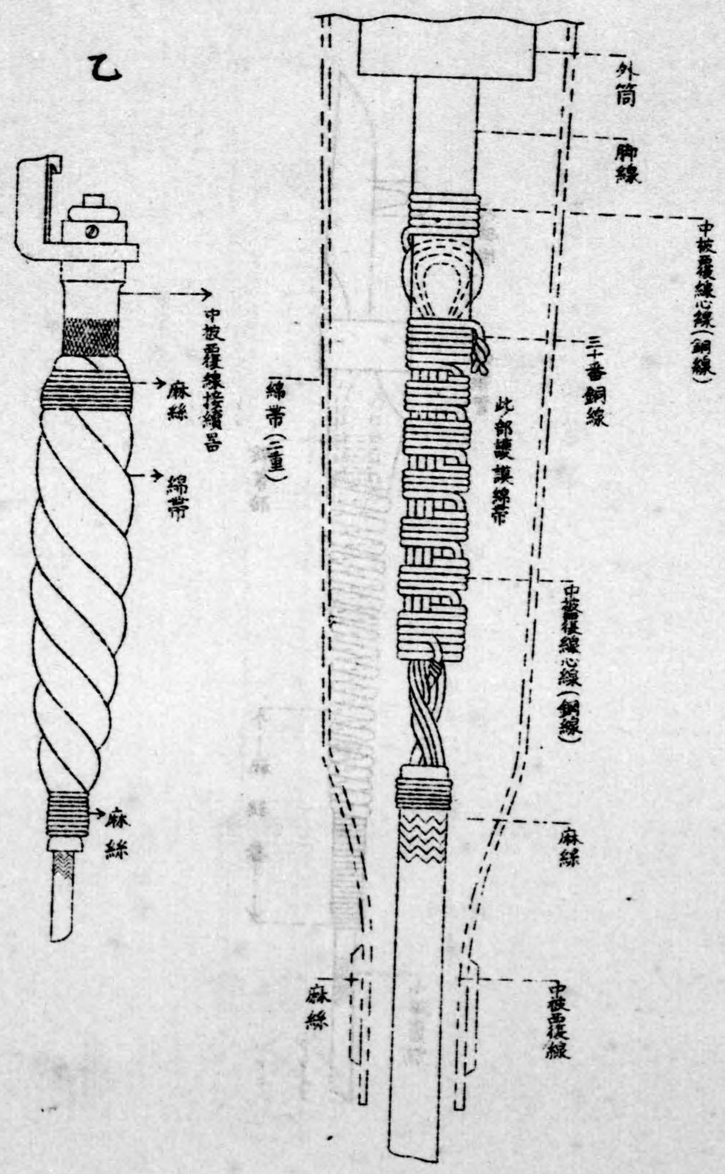
第五圖



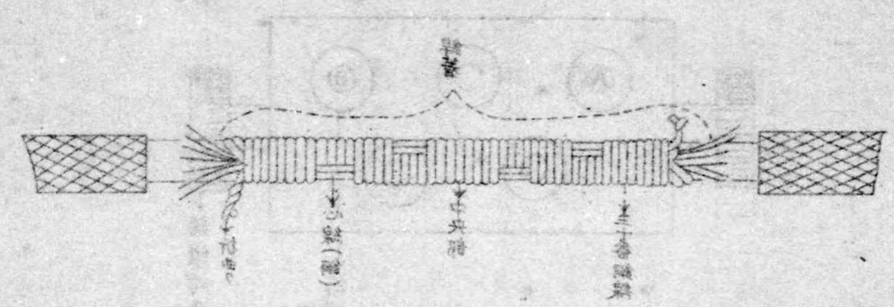
第六圖

甲

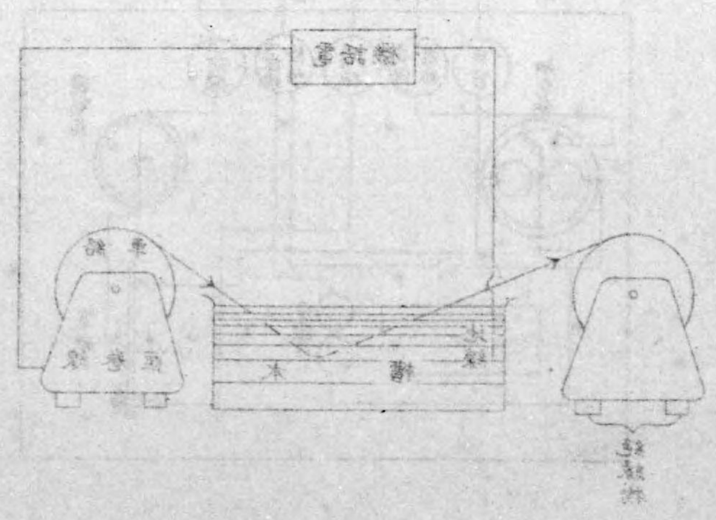
乙



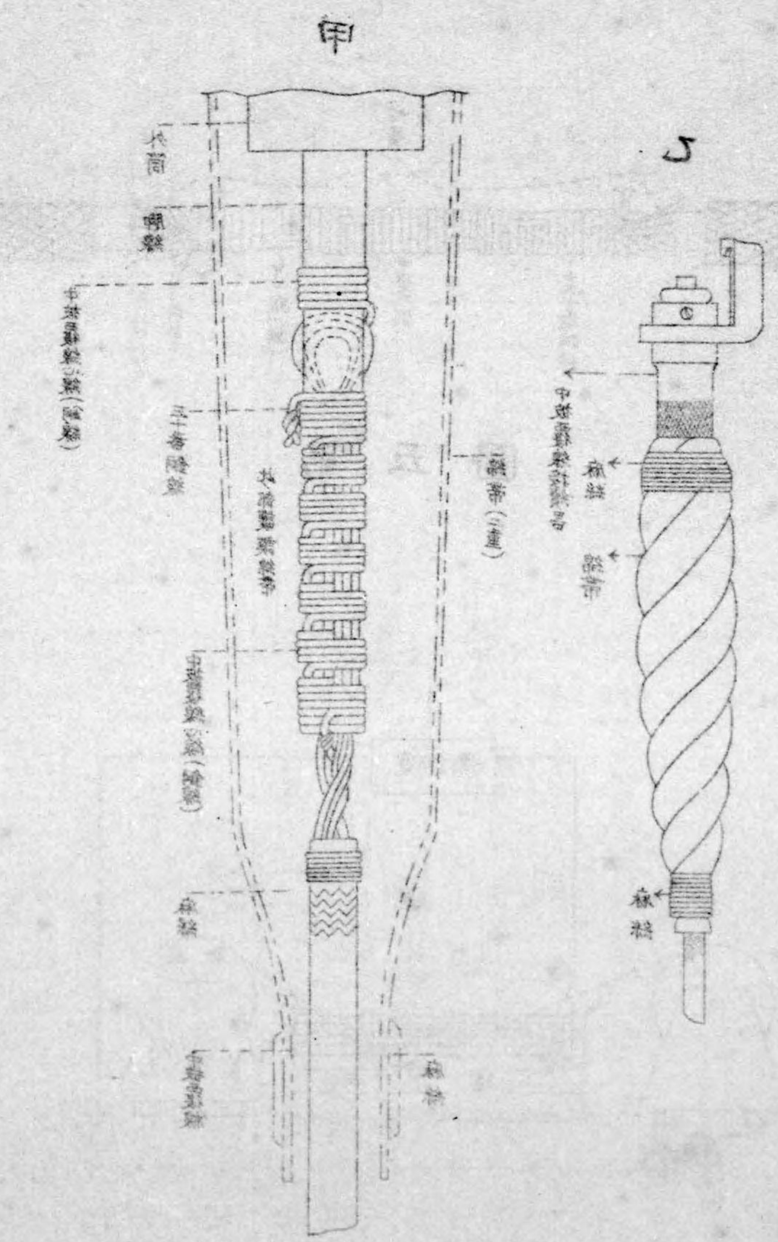
第四圖



第五圖

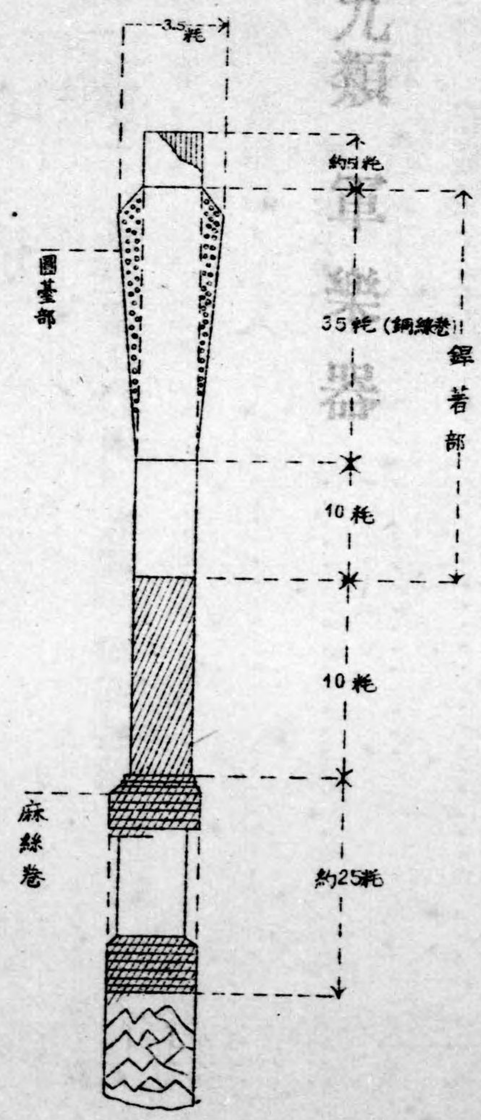


第六圖

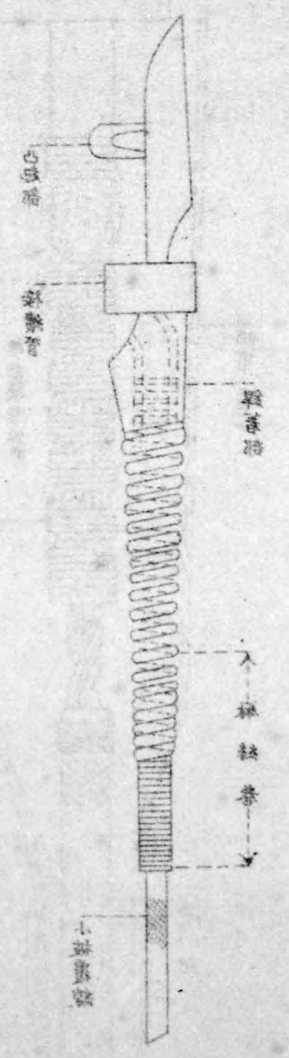


第七圖

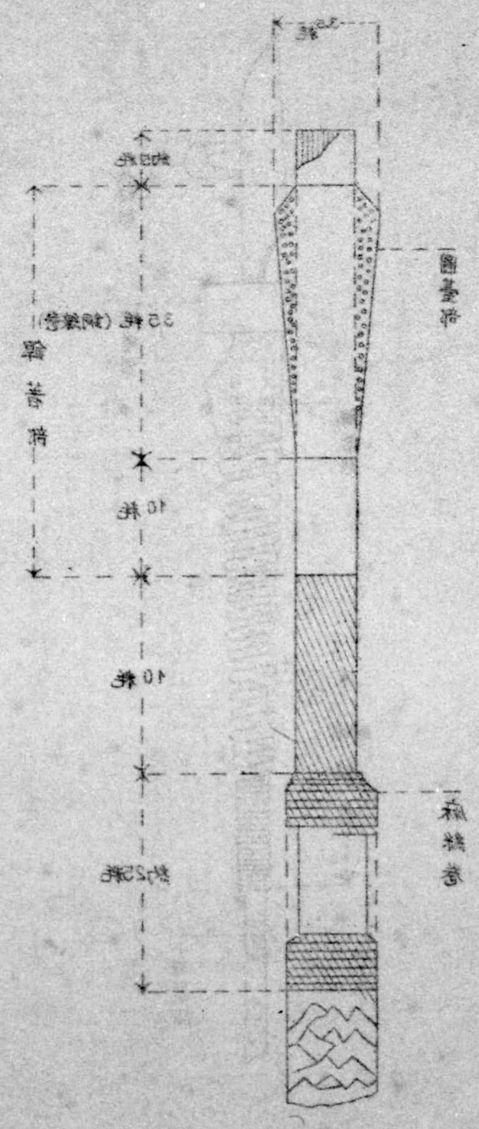
第八圖



第九圖



第八圖



第九類　軍樂器

第九類　軍樂器

目次

第一章　主要ナル軍樂器ノ類別、名稱及細部名稱……五頁
第二章　手入……八
第一節　常用品ノ手入……一二
第一款　普通手入……一二
第二款　精密手入……一五
第二節　貯藏品ノ手入……一九
第三章　格納……二一
第四章　檢査……二三
第五章　分解及結合……二八
第六章　取扱上ノ注意……二九
第七章　修理方法ノ概要……三二

第九類　軍樂器

第一章　主要ナル軍樂器ノ類別、名稱及細部名稱

第一條　主要ナル軍樂器ハ構成材料ノ種類ニ從ヒ木製樂器、金屬製樂器、革製樂器ニ類別ス

第二條　木製樂器ト稱スルモノ左ノ如シ

一　プチット、フリユート「ユット」（金屬製ノモノヲ除ク）

二　グランド、フリユート「ユット」（金屬製ノモノヲ除ク）

三　オーボア「ユット」

四　プチット、クラリネット「ミb」

五　グランド、クラリネット「シb」

六　カスタゲット

七　ピアノ

第三條　木製樂器ノ細部名稱左ノ如シ

上幹（シヤウカン）、下幹（ゲカン）、蕣口（アサガホ）、嘴口（クチバシ）、嘴環（クチワ）、嘴覆（クチオホヒ）、簧舌（クワウゼツ）、丹哺（タンポ）、鍵七（カギ）、鍵坐（カギザ）、指懸（ユビカケ）、指孔（ユビアナ）、鍵孔（カギアナ）、圓針（マルメリ）、平發條（ヒラハツデウ）、駐螺（チユウラ）、譜挾（フバサミ）、譜挾立（フバサミタテ）等

第四條　金屬製樂器ト稱スルモノ左ノ如シ

一　サクソフオンヌ、アルト「ミb」

二　サクソフオンヌ、テノール「シb」

三　サクソフオンヌ、バリトン「ミb」

四　コルネ、ア、ピストン「シb」

五　ビユーグル「シb」

六　トロムペット「シb」

七　アルト「ミb」

八　トロンボンヌ「ユット」

九　トロンボンヌ「シb」

十　バース「シb」

十一　コントルバース「ミb」

十二　コントルバース「シb」

十三　シムバル

十四　トリアングル

十五　ヂヤバゾン

十六　ライムブル

十七　プチット、フリユート「ユット」木製ノモノヲ除ク

十八　グランド、フリユート「ユット」木製ノモノヲ除ク

軍樂器　主要ナル軍樂器ノ類別、名稱及細部名稱

第五條　金屬製樂器ノ細部名稱左ノ如シ

本管（ホンクワン）、支管（シクワン）、伸縮管（シンシユククワンスイコウ）、吹口（クワツソクシ）、活塞子（クワツソクシ）、活塞管（クワツソククワンオンコウ）、音孔、指坐（シザ）、上塞（ジヤウソク）、下塞（ゲソク）、蛇線發條、蕣口、嘴口、嘴環、嘴覆、丹哺、鍵七、鍵坐、指懸、圓針、平發條、譜挾、譜挾立等

第六條　革製樂器ト稱スルモノ左ノ如シ

一　プチット、ケース

二　グロス、ケース

三　タムブール、ド、バスク

第七條　革製樂器ノ細部名稱左ノ如シ

皷胴（コドウ）、皷革（コガワ）、緊螺（ハリネジ）、枠輪（ワクワ）、革框（カワワク）、響線（ヒビキセン）、鉦坐（シヤウザ）、譜挾、譜挾立等

第二章　手入

第八條　手入ノ要旨ハ各部ヲ拭淨シテ塵埃、汚垢、水分等ノ附著ヲ去リ又脂油ヲ塗施シ發銹、磨損及變質等ヲ豫防シ以テ軍樂器ノ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

第九條　手入ニ關スル注意事項左ノ如シ

一　各部ハ常ニ叮嚀ニ拭淨シ特ニ水分ヲ殘存セシムヘカラス

二　塵埃ノ附著シタルトキハ之ヲ除去シタル後ニ在ラサレハ拭摩スヘカラス

三　內部ニ水分若ハ外物ノ侵入セルモノハ之ヲ除去スヘシ

四　銀製部又ハ黃銅製部（鍍銀セル黃銅部ヲ含ム以下同シ）ハ柔軟ナル布片ヲ以テ徐ニ之ヲ拭淨シ塵埃、銹斑ヲ除去スヘシ但シ之ヲ强摩セサルコト及鍍銀ヲ剝落セシメサルコトニ注意スヘシ又磨材料ヲ用ヰタルトキハ「フランネル」ヲ以テ充分之ヲ摩擦シタル後乾布ヲ以テ拭摩スルヲ

要ス

五　木部ハ乾燥セル「フランネル」ヲ以テ疵瑕ヲ生セサル如ク徐ニ拭淨スヘシ

六　發條、駐螺等ノ鐵具ハ之ヲ拭淨シタル後少量ノ脂油ヲ塗施スヘシ

第十條　手入ニハ左ノ材料ヲ使用スルヲ可トス

一　筆　細部ノ拭淨又ハ注油ニ用ウ

二　木綿布、「フランネル」布片　拭淨ニ用ウ

三　揉革　笛類ノ銀製部ヲ拭淨スルニ用ウ

四　絨片　黃銅製部ノ拭淨ニ用ウ

五　海綿、腸線（弦線ノ類）　管中ノ拭淨ニ用ウ

六　眞鍮磨　金屬部ノ拭磨ニ用ウ

第十一條　手入ニ使用スヘキ主要ナル脂油ノ種類、用途及使用區分左ノ如シ

種類	用途	使用區分
「ワニス」	防錆用	永ク使用セサル鐵部
「オレーフ」油、「ワセリン」	防錆及防擦用	支管滑走部、駐螺及發條
揮發油、「テレビン」油	洗滌用	汚垢及舊脂油附著セル鐵部及木部
鯨油、牛脂ノ複合脂	塗布用	革具（皺革ヲ除ク）

第十二條　手入ヲ分チテ常用品ノ手入及貯藏品ノ手入トシ常用品ノ手入ヲ分チテ普通手入及精密手入ノ二トス

常用品普通手入トハ使用後行フ手入ヲ謂フ

常用品精密手入トハ普通手入ニ依リ汚垢又ハ錆等ヲ除去シ能ハサルトキニ行フ手入ヲ謂フ

貯藏品ノ手入トハ貯藏品ヲ精密ニ手入スルヲ謂フ

第一節　常用品ノ手入

第一款　普通手入

第十三條　普通手入ハ使用後外部ヲ清潔ナル布片ヲ以テ拭淨スルノ外左ノ各號ニ依ルヘシ

一　木製樂器ハ嘴口、上幹及下幹ヲ離脫シ其ノ内外及接合機軸ヲ拭淨シ要スレハ脂油ヲ塗施スヘシ

二　金屬製樂器中黃銅製ノモノハ吹口、支管、活塞子ヲ拔キ内部ノ唾液ヲ除去シ外部ニ於ケル唾液ノ飛沫、手指ノ汗若ハ雨水等ノ爲汚染シタル部分ヲ拭淨シ支管ノ滑定部ニハ要スレハ「オレーフ」油ヲ塗施スヘシ活塞管ニハ絶對ニ脂油ヲ塗施スヘカラス黃銅製ニ在

ラサル樂器ハ外部ヲ拭淨シ鐵部ニハ要スレハ脂油ヲ塗施スヘシ但シ金屬製「フリユート」及「サクソフオン」類ノ手入ハ本號ニ依ルノ外前號ニ準シ行フモノトス

三　革製樂器ハ外部ノ塵埃ヲ除去シ緊螺ヲ緩メ螺絲部ニハ要スレハ脂油ヲ塗施シ機ハ乾燥セル木綿布ヲ以テ活潑ニ拭淨スヘシ

四　譜見臺ハ之ヲ拭淨シ要スレハ其ノ樞鉸部ニ少量ノ脂油ヲ塗施シ開閉ヲ自在ナラシムヘシ

五　燈具ハ之ヲ拭淨シ火筒ハ透明ナラシメ蠟燭立ハ熔蠟ノ附著ヲ除去スヘシ

六　譜盒ハ内外部ヲ拭淨シ特ニ其ノ外部ハ之ヲ叮嚀ニ拭摩シ固有ノ光澤ヲ發セシメ蓋革及携帶革ノ裏面ハ極メテ僅少ノ脂油ヲ含マシメタル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

七　簧舌製作器ハ各部ヲ拭淨シ其ノ鐵部ニ脂油ヲ塗施シテ發銹ヲ豫防部シ及ハ鋭利ナラシムヘシ

八　袋ハ塵埃ヲ除去シ汚染シタルモノハ之ヲ洗滌スヘシ

九　革嚢ハ内外部ヲ拭淨シ蓋革、底部以外ノ各部ハ硬化セシメサルヲ度トシ外部ヨリ僅少ノ脂油ヲ塗施シ細革條ハ他ノ部ニ比シ稍多量ニ脂油ヲ塗施スヘシ

十　携行箱ハ内外部ノ塵埃ヲ除去シタル後布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シ時時内部ヲ風乾スヘシ

十一　軍樂器手入具ノ手入ハ左ノ如シ

イ　鋸、鐵床及小刀ハ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨シタル後常用礦油ヲ薄ク塗施スヘシ

ロ　嘴旋力、鐵鉗、轉螺器、釘拔、針金切、鎚、錐、「ピンセツト」、鋏、鳩目打拔及針拔器ハ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨スヘシ但シ及部、鎚頭打面部等ハ前號ニ準シ手入スヘシ

ハ　鑢ハ鑢目拂ヲ以テ削屑ヲ掃除スヘシ

ニ　盤陀鏝ハ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨スヘシ但シ油氣アル布類ヲ使用スヘカラス

第二款　精密手入

第十四條　精密手入ハ軍樂隊長監督ノ下ニ行フヘシ

第十五條　精密手入ハ通常毎年二回之ヲ行フモノトス

第十六條　精密手入ハ左ノ如シ

一　木製樂器ハ嘴口、上幹及下幹ヲ離脱シタル後各部ヲ分解シ左ノ手入ヲ行フヘシ

軍樂器　手入　常用品ノ手入

イ　木部ハ少量ノ揮發油ヲ含マシメタル布片ヲ以テ全管及諸孔ヲ徐ニ拭淨スヘシ但シ孔ノ附近ニ汚垢ノ膠著セルモノヲ除去スルニハ布片ヲ纏ヒタル小木片ヲ用ウルヲ要ス此ノ際特ニ金屬片ヲ用ヰサルコトニ注意スヘシ

ロ　各金具ノ接著面及其ノ附近並其ノ他各部ニ膠著セル汚垢ハ揮發油ヲ含マシメタル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

ハ　平發條、圓針及駐螺ハ拭淨後「オレーフ」塗油ヲ施スヘシ其ノ發錆セルモノハ局部ニ揮發油ヲ塗施シ布片ヲ纏ヒタル小木片ヲ以テ徐ニ拭淨スヘシ此ノ際圓針ヲ折損セサルコトニ注意スルヲ要ス

二　金屬製樂器ノ手入左ノ如シ

イ　黃銅製ノモノハ吹口、支管、活塞子ヲ離脱シ吹口附近ノ管及支管ノ内部ハ含水セル海綿ノ小片ヲ弓弦ノ一端ヲ縛著シタルモノヲ貫通シテ徐ニ拭淨シ其ノ他ノ管内ニハ水ヲ注入シテ洗滌シ更ニ成ル可ク水分ヲ除去シ次ニ其ノ各部及譜挾ヲ拭淨シ要スレハ眞鍮磨ヲ以テ拭磨スヘシ

吹口ノ内部ハ柔軟ナル紙片ヲ通シテ輕ク拭淨スヘシ

活塞子ハ特ニ疵瑕ヲ生セシメサルコトニ注意シテ徐ニ拭淨シ上塞、下塞ハ之ヲ離脱シテ塵埃及水分ヲ除去シ指坐、上塞及下塞ノ螺絲部ハ之ヲ清潔ニシ其ノ機能ヲ圓滑ナラシムヘシ

活塞管ノ内部ハ柔軟ナル布片ヲ以テ徐ニ拭淨シ汚垢ヲ全ク殘ササル如クスヘシ特ニ此ノ部ニハ絶對ニ脂油ヲ觸レシメサルヲ要ス

支管ノ滑走部ニハ「オレーフ」油ヲ僅ニ塗施シタル後各部ヲ結

合スヘシ

ロ　金屬製「フリユート」及「サクソフオン」類ノ手入ハ其ノ外部ヲイ號ニ依リ拭淨スルノ外第一號ニ準シ之ヲ行フモノトス

三　革製樂器ハ緊螺、枠輪、響線及鉦坐ヲ離脱シ革部ハ乾布ヲ以テ拭ヒ黄銅製部ハ之ヲ拭淨シ要スレハ眞鍮磨ヲ以テ拭磨シ各鐵部特ニ螺絲部ニハ「オレーフ」油ヲ塗施スヘシ

撥ハ普通手入ニ準スヘシ

四　譜見臺、燈具、簧舌製作器、袋、革嚢及携行箱ハ普通手入ニ準スヘシ

五　譜盒ハ普通手入ニ準スルノ外黄銅製金具ハ眞鍮磨ヲ以テ之ヲ拭磨シ又金具ト革部トノ接觸部ニ綠錆ヲ生シタルモノハ之ヲ拭淨スヘシ

六　軍樂器手入具ハ普通手入ニ準スルノ外左ノ如シ

イ　錆ヲ除去スルニハ「テレビン」油ヲ含マシメタル刷毛又ハ布片ヲ以テ摩擦スヘシ

ロ　發錆甚シキモノニ在リテハ三十分以上石油又ハ「テレビン」油中ニ浸シタル後木賊ヲ以テ數次之ヲ摩擦シ除錆シタル後乾燥セル布片ヲ以テ拭フヘシ

ハ　塗料ノ剝脱セル部分ハ「テレビン」油ヲ含マシメタル刷毛又ハ布片ヲ以テ拭淨シテ油氣及水分等ヲ除去シタル後塗染スヘシ

第二節　貯藏品ノ手入

第十七條　貯藏品ノ手入ハ常用品精密手入ヲ準用スルノ外左ノ如シ

軍樂器　手入　貯藏品ノ手入

一　木部ハ發黴シタルトキハ直ニ之ヲ拭淨シ又發黴シ易キ期節ニ於テハ屢拭摩スルヲ要ス

二　平發條、圓針及駐螺等ノ發錆シタルモノハ之ヲ拭除シ少量ノ脂油ヲ塗施スヘシ

三　各種樂器ノ鐵部（平發條、圓針及駐螺ヲ除ク）ニハ格納用礦油ヲ塗施スヘシ格納用礦油ヲ除去スル必要アルトキハ洗滌用油ヲ使用スルヲ可トス

四　貯藏セル革具（皮革ヲ除ク）ハ通常毎年一、二回適當ナル時期ニ於テ脂油ヲ塗施スヘシ但シ發黴セル革具ハ直ニ之ヲ拭淨シ又發黴シ易キ期節ニ於テハ屢拭摩スルヲ要ス

五　軍樂器手入具中塗染シ非サル鐵部ハ「ワニス」ヲ塗布スヘシ但シ鑢ハ「ベルニー」ヲ塗布スヘシ

第三章　格納

第十八條　貯藏品ハ一時的格納ノモノ及永久的格納ノモノ竝新古ヲ區分シ其ノ手入及取扱等ニ便ナル如クスヘシ

第十九條　樂器ハ手入ヲ行ヒタル後ニ在ラサレハ格納スヘカラス

第二十條　樂器ヲ陳列懸吊又ハ依托スルニハ保存、取扱及負擔量ヲ顧慮シ墜落、顚倒、格納品相互ノ損傷又ハ托材ヲ破損スルコトナキ樣注意スヘシ

第二十一條　貯藏品ニハ覆ヲ施シ庫外ヨリ侵入スル大氣ニ直接曝露セシメス且塵埃ヲ防クヘシ

第二十二條　格納庫内ニ於テハ手入ヲ行ハサルヲ可トス若庫内ニ於テ手入ヲ行フトキハ塵埃ヲ他ノ格納品ニ蒙ラシメサル爲幕ニテ手入場所ヲ

區劃スルカ如クスルヲ要ス

第二十三條　貯藏品ハ倉庫ノ周壁又ハ家根裏ニ近接セシメサルヲ可トス

第二十四條　革具ハ庫內ノ換氣ヲ行フ際通風ニ便ナル如ク格納スルヲ可トス

第二十五條　格納倉庫ニ關スル注意事項ハ第一類第一編第十九條ニ準スヘシ

第二十六條　木製樂器又ハ金屬製樂器ハ譜挾ヲ離脫シ之ヲ布製ノ袋ニ納メ棚上ニ陳列スヘシ樂器ヲ陳列スル棚ニハ絨布ヲ敷キ其ノ損傷ヲ豫防シ且樂器中ノ丹哺及格納用絨布ノ蟲害ヲ豫防スル爲棚上ニ紙ニ包ミタル「ナフタリン」ヲ置クヘシ但シ一時的格納ノ樂器ニ在リテハ袋ニ納ムルコトナク硝子戸ヲ有スル棚上ニ陳列格納スルヲ可トス

第二十七條　木製樂器ノ掃除器ハ各樂器ノモノヲ取リ纏メ之ニ「ナフタリン」ヲ挿入シ箱內ニ密閉格納スヘシ但シ一時的格納ノモノニ在リテハ木製樂器ヲ陳列シタル棚ノ一隅ニ懸吊シ置クコトヲ得

第二十八條　革製樂器ハ緊螺ヲ緩メ且特ニ濕氣ヲ蒙ラシメサルコトニ注意シ棚上ニ陳列格納スヘシ

第二十九條　譜見臺ハ之ヲ分解シ譜面依托部及脚部ヲ閉鎖シ譜見臺箱ニ格納スヘシ

第三十條　燈具又ハ簧舌製作器ハ之ヲ使用スルトキノ外常ニ所定ノ容器ニ格納シ置クヘシ

第三十一條　譜盒ハ其ノ蓋ヲ開キ且負革ノ局部ヲ懸吊用紐ノ爲ニ屈折セシメサルコトニ注意シ概ニ箇ヲ一束トシテ懸吊スヘシ

第三十二條　袋ハ樂器ト別ニ格納スル場合ニ於テハ之ヲ疊ミテ棚上ニ整置スヘシ

第三十三條　革嚢ハ各部ノ蓋ヲ開キ負革ハ簪鐶ノ控著ヲ解キ簪鐶部ヲ麻絲ノ類ヲ以テ結束シ懸吊スヘシ

第三十四條　軍樂器手入具ノ格納ハ左ノ如シ

一　箱内ニ油紙ヲ布キ手入具ヲ其ノ上ニ排列整置スヘシ

二　鑢、「ピンセット」、鳩目打拔及針拔器ハ各其ノ室ヨリ離脱シ前號ニ準シ排列整置スヘシ

第四章　檢査

第三十五條　檢査ノ要旨ハ手入及取扱ノ闕點竝加修ノ時期ヲ前知シ之ニ對スル處理ヲ迅速ニシ以テ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

第三十六條　檢査ニ際シ發銹及破損等ノ箇所ヲ發見シタルトキハ必ス其ノ理由ヲ探究シ同一過失ニ陷ラサル如ク豫防スヘシ

第三十七條　檢査ヲ分チテ常用品檢査及貯藏品檢査ノ二トス常用品檢査ハ日常使用後及精密手入ヲ行ヒタルトキ之ヲ行ヒ貯藏品檢査ハ通常毎年二回（雨期後及夏季）之ヲ行フモノトス

第三十八條　常用品檢査ニ當リ主トシテ注意スヘキ事項左ノ如シ

一　木製樂器及金屬製樂器ハ之ヲ吹奏シ發音正確ナルヤヲ檢スヘシ

若其ノ發音正確ヲ闕クトキハ左ノ各號ニ依リ點檢スルヲ要ス

イ　吹氣ノ漏洩スルコトナキヤ（指孔及鍵孔ヲ有スル樂器ハ諸孔ヲ堅ク閉塞シ煙ヲ吹キ入レ其ノ煙ノ漏洩スルコトナキヤヲ檢スルヲ可トス）

ロ　鍵匕ノ作用良好ナルヤ

ハ　丹哺、指孔及鍵孔ハ確實ニ開閉スルヤ

ニ　發條ノ機能良好ナルヤ

ホ　丹哺ノ腐朽又ハ毀損セルモノナキヤ（僅ニ毀損セルコトアルモ音律ニ影響セサルモノハ使用スル）

モ支障ナキモノトス

ヘ　活塞子ノ機能良好ナルヤ又支管、上塞及下塞ノ離脱、裝著圓滑ナルヤ

ト　樂器ニ附著セル「キルク」ノ固著確實ナルヤ又磨損セルコトナキヤ

二　革製樂器ハ緊螺ノ機能良好ナルヤ又響線ノ裝著方法適當ナルヤ

三　拭淨及塗油適當ナルヤ

四　革具（皺革ヲ除ク）ハ損傷又ハ龜裂シ非サルヤ（革條類ハ軟軟平滑ナルヲ可トス脂油適度ナルモノハ之ヲ指大ノ曲度ニ彎曲スルモ龜裂ヲ生セスシテ稍變色スルモ原形ニ復スレハ革色モ故ニ復スルモノトス但シ彎曲ヲ試ムルニ當リテハ響孔ノ位置ヲ避クヘシ）

五　軍樂器手入具ノ檢査左ノ如シ

イ　嘴旋力、鐵鉗、釘拔及針金切等ハ其ノ鉸釘部ノ緩緊適度ナリヤ又頭部及脚部ハ變歪若ハ毀損シ非サルヤ

ロ　鋏ハ鋏斷ニ際シテ左右ノ刃部一點ニ於テ相接觸シ其ノ接點ハ把持部ニ於ケル加働力ニ從ヒ刃ノ後端部ヨリ漸次尖端ニ進行シ得ルヤ

ハ　鎚及鐵床ハ其ノ打面平滑ニシテ特ニ其ノ稜緣部闕損シ非サルヤ

ニ　鑢ノ刃間ニハ削屑其ノ他塵埃、汚垢ヲ附著シ非サルヤ又刃ハ發錆シ非サルヤ

ホ　鋸ハ身ニ偏倚ナキヤ又齒部ハ闕損若ハ磨滅シ非サルヤ

ヘ　轉螺器、鳩目打拔ノ刃部及錐ノ尖部ハ變歪闕損シ非サルヤ

第三十九條　貯藏品ノ檢査ハ前條ニ準スルノ外左ノ各號ニ注意スヘシ

一　防錆及防蟲方法ノ適否

二　格納方法ノ良否

第五章　分解及結合

第四十條　樂器ハ手入、檢査及修理等其ノ必要ニ應スル部分ノミヲ分解シ猥リニ他ノ部分ニ及ホスヘカラス

第四十一條　分解及結合ニ際シテハ順序方法ヲ誤ラサルコト、規定外ノ器具ヲ使用セサルコト及各部品ヲ混淆セサルコトニ注意スヘシ

第四十二條　分解及結合困難ナルトキハ强テ之ヲ行フコトナク修理ノ手續ヲ爲スヘシ但シ金屬製樂器ノ分解ヲ要スル部分ニ汚垢又ハ脂油ノ爲膠著セルモノアルトキハ彝口ヨリ温湯ヲ注入シテ之ヲ分解スルコトヲ得

第四十三條　分解及結合ヲ普通分解、普通結合、特別分解及特別結合ニ分ツ

第四十四條　特別分解及特別結合ハ軍樂隊長監視ノ下ニ熟練ナル樂手ヲシテ行ハシムルモノトス

第四十五條　普通分解トハ嘴口、嘴鐶、簧舌、上幹、下幹、支管、伸縮管、吹口、活塞子及上塞ヲ分解スルヲ謂フ

第四十六條　特別分解トハ第四十七條ニ示ス部品ノ全部又ハ其ノ一部ヲ離脱スルヲ謂フ

第四十七條　特別分解ヲ行フニハ普通分解ヲ行ヒタル後彝口、鍵七、鍵孔、下塞及蛇線發條ヲ離脱スルモノトス但シ一部ノ特別分解ニ在リテハ普通分解ヲ行ハサルコトヲ得

第六章　取扱上ノ注意

第四十八條　樂器ハ構造精緻ニシテ軟質ノ材料ヨリ成ルヲ以テ特ニ叮嚀

ニ取扱フヲ要ス

第四十九條　樂器ノ手入取扱不良ナルトキハ各部ノ機能ヲ害シ微細ナル損傷ト雖モ音色ヲ損スルコトアルヲ以テ特ニ注意スヘシ

第五十條　樂器ヲ取扱フニ當リテハ雨雪、塵埃等ヲ防護スルコトニ常ニ注意スルヲ要ス樂器ヲ使用セサルトキハ之ヲ袋ニ收メ且鐵石ノ類ニ觸レシメ又ハ危險ナル場所ニ置ク等ノコトアルヘカラス

第五十一條　新樂器又ハ貯藏品ヲ使用スルニ當リ當初數日間ハ丹哺ノ位置ヨリ往往吹氣ノ漏洩スルモノ又ハ活塞子ノ運動圓滑ヲ闕クモノアルヲ以テ之ヲ調整シテ使用スヘシ

第五十二條　使用中ノ木製樂器ヲ寒冷ナル物體上ニ置クヘカラス（樂手ノ呼吸ト掌中ノ溫度ニ依リ加溫セラレタル樂器ヲ直ニ冷却スルトキハ木部ニ龜裂ヲ生スル原因トナル）

第五十三條　樂器ヲ地上ニ置クコトハ之ヲ避クルヲ可トス但シ已ムヲ得サル場合ニ於テ地上ニ置クヲ要スルトキハ顚倒セサル如ク確實ニ樹立又ハ叉立スヘシ樹立困難ナル樂器ハ其ノ顚倒セサルコトヲ確認シタル後他ノ樂器又ハ物體ニ依托スルヲ要ス

第五十四條　樂器ヲ顚倒シ又ハ衝突スルコトハ其ノ精度ヲ害スルヲ以テ戒愼セサルヘカラス特ニ薄肉ノ金屬鈑ヨリ構成セラレアル金屬製樂器ハ僅ニ他物ト衝突スルコトアルモ直ニ凹損、變歪ヲ生スルニ至ルヲ以テ取扱上注意スヘシ又活塞子及活塞管ハ僅少ト雖變歪又ハ疵瑕ヲ生スルトキハ直ニ樂器ノ機能ヲ害スルヲ以テ注意スヘシ

第五十五條　簧舌ヲ有スル樂器ハ使用後直ニ嘴覆ヲ裝スヘシ但シ「オーボア」ニ在リテハ簧舌ヲ離脫シ之ヲ簧舌函ニ收納シ置クヘシ

第五十六條　樂器ヲ重疊シ或ハ一人ニテ三箇以上ノ樂器ヲ携行スヘカラス若ニ箇ノ樂器ヲ携行スルトキハ之ヲ各別ニ双手ヲ以テ支持シ且衝突

セシメサルコトニ注意スヘシ

第五十七條　樂器ヲ棚又ハ机上ニ平置スルニハ樞要ナル機能ヲ有スル部分ヲ上方ニシテ安置スルコトニ注意スヘシ

第七章　修理方法ノ概要

第五十八條　簧舌ノ變質若ハ毀損シタルモノハ之ヲ良好ナルモノト交換シ又不具合ナルモノハ之ヲ調整スヘシ

第五十九條　丹哺ノ腐朽若ハ毀損シタルモノハ之ヲ良好ナルモノト交換スヘシ

丹哺ト孔トノ密著不充分ナルトキハ其ノ密著ヲ確實ナラシムル爲ニ若干時間絲ヲ以テ之ヲ緊縛シ置クヲ可トス

丹哺ヲ膠著スルニハ封蠟ヲ以テスヘシ

第六十條　圓針、平發條及蛇線發條ノ折損若ハ機能不充分ナルモノハ之ヲ交換スヘシ

第六十一條　活塞子及鍵七ヲ作用スルニ當リ金屬部ト金屬部又ハ木部ト相衝擊スル音ヲ發スルトキ若ハ鍵七開口ノ度適當ナラサルトキハ「キルク」ヲ交換スヘシ但シ修正スヘキ部分ニ依リテハ「キルク」ニ代ユルニ鞣革ヲ以テシ之ヲ赤色綿絲ニテ緊縛スルコトヲ得

「キルク」ヲ膠著スルニハ護謨糊又ハ盤石糊ヲ以テスヘシ

大正四年二月十二日印刷
大正四年二月十五日發行
（兵器保存要領第八、九類奥附）
定價金拾五錢

東京市麴町區平河町一丁目二番地
翻刻發行者　兵用圖書株式會社
代表者　小林又七

東京市麴町區隼町四番地
印刷者　高井福太郎

兵用圖書株式會社發行之證

發行所
東京市麴町區平河町一丁目二番地
兵用圖書株式會社
電話特番町三七七四番
振替東京一八〇八八番

278
147

帝國水利土地改良會
東京圖書館

明治四年一月八日發行
大正四年一月二十日訂正
大正四年一月二十日再版
大正四年一月二十日再版

明治四年一月二十日再版
大正四年一月二十日再版

著作兼發行者
東京市麻布區霞町三十番地
高橋太郎

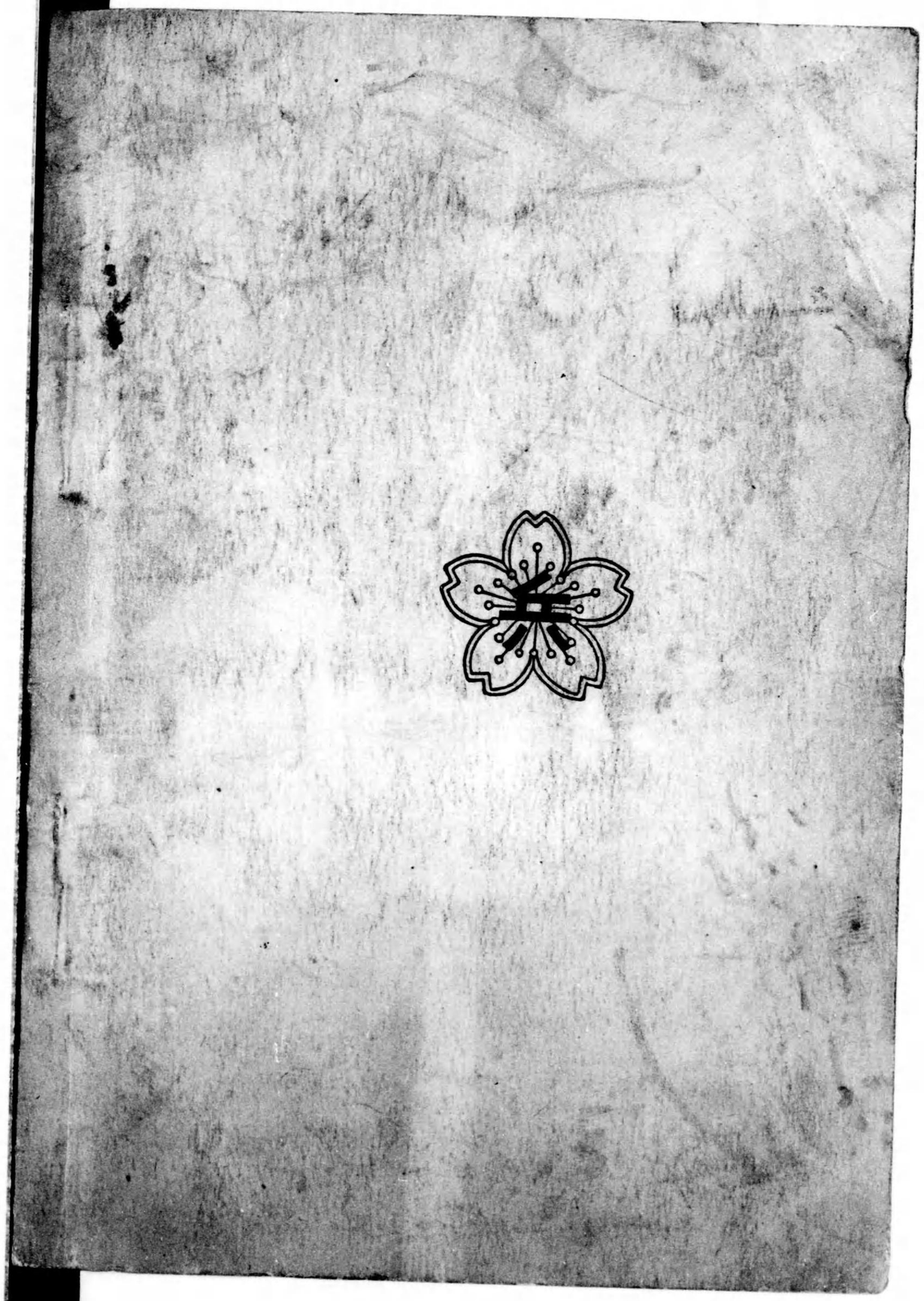
東京市麻布區霞町三十番地
印刷者
東京市麻布區霞町三十番地
分工場
小林又一

東京市麻布區霞町三十番地
印刷所
東京市麻布區霞町三十番地
靈南堂印刷所

定價金壹圓
（郵稅拾錢內國郵便切手貼用ノ事）

灵田圖説

帝國水利土地改良會



終